セフィロトの樹は原罪の実をつける

雨音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
セフィロトの樹は原罪の実をつける

【Ｎコード】
Ｎ９７１９Ｖ

【作者名】
雨音

【あらすじ】
世界の中心で一冊の本を手に取る。
その本は何度も読み返されたもの。
その本は世界だった。

◆

人が二つの力を得た時、世界は色を失い、とても小さくなった。
今の世界は“塔”を中心としたこの“街”という小さな殻。

終わりゆく“外の世界”。
魂に刻まれた罪とマホウ。
舞い降りる天使と七つの大罪。
破壊と再生。
喪失と求道。
そして、世界の真実。
――世界は世界に対して終焉の選択を迫る。

過去“ＮＯ．３”と呼ばれた街の最底辺。
天使が舞う日に彼と彼女は出会った。

◆

開けた扉は閉まることなく、世界の終わりへとページを重ねる。

（他サイトでもこっそり連載中）

序章―ハジマリの詩―（前書き）

ハジマリのハジマリに
この物語はフィクションです。実在する・した人物、団体、国家、企業他固有名称で表すことの出来る物全てと名称や背景が似てこそすれ、何の関係もありません。

序章―ハジマリの詩―

――始まりは唐突に。

「もう、ゲームは終わりか？」

星が瞬く天蓋の下二つの影が向き合う。

圧倒的な存在感を纏う影の前に膝をつくもう一つの影。

「……“俺たちのゲーム”は終わりだ。」

絶望に打ちひしがれていた男は手元に転がる2本の剣に体重をかけ立ち上がる。

皮肉なことに護るために揮った力の真価は失うことで得られるものだった。

「俺たちは二つで一つだった。」

気がつくべきだった。その異常に、特別なことに、大切だったことに。

「兄弟、辛いなら世界の運命に身を委ねても構わないんだ。もはや、新しい選択を作ることの方が罪というもの。」

「終わったものを終わらせる事が罪だとは思わない。」

震える膝に力を入れ剣を構える。絶対的な力に対抗するにはあまりにも非力。

友が望んだ未来、自分に託された選択、彼女の願い。その重圧を振り払うかのごとく男は咆哮する。

「俺が求めるものは、世界にとって正しくない選択かもしれない。だけど、俺はこんな世界を認めない！」

「それがお前の選択か。」

声色に失望を滲ませながら長剣の切っ先を男へと向ける。

男は双剣を構え目を瞑った。

「描いた未来の形を成すのが罪だというなら、新しく作れば良い。」

それすらも罪だと言うのなら――受け入れ、書き換えよう。

小さく呟いて男は目を開き、障害に対し殺意をぶつける。冷たい視線を感じながら障害は嗤った。
「なるほど、それがお前が世界に望むことか。」
「俺が求めるのは過去でも今でもない。もちろんお前達の言う未来でもない！俺が望むのは――」
――俺が望むのは“今から続くこれから”なんだ。
障害は、まるで駄々をこねる子供のようだと思いながら、男に対して宣告をする。
「遊戯が終わったのなら、お前の選択とお前たちの未来を終わらせる。」
その宣言を聞くも男は口元に笑みすら浮かべながら口を開いた。
「いや……これから“三人でのゲーム”がスタートだ。」
科せられた運命には準じた選択かもしれない。これが“俺達”の存在意義だと言われたこともあった。
魂に刻まれた情報？決められた選択？そんなの知ったことか。
星が瞬く天蓋の下二つの影が言葉を紡ぐ。
響くその声は世界の終わりを選択する詩。
「全てに終焉を！“Ａｔｚｉｌｕｔｈ”Ｍｕｓｐｅｌｌｚｈｅｉｍｒ―Ｔｕｒｍ ｖｏｎ Ａｕｓｆｌｕ？！」
「未来に祝福を！“Ａｔｚｉｌｕｔｈ”Ｒｅｐｌｉｇａｒｄ―Ｒｅｇｅｌ Ｅｒｎｅｕｅｒｕｎｇ！」
そして終わりは緩やかに――。

Act. 1 ―Regel “ルール”―

見上げた所に存在しているのは灰色に彩られた無機質な天井。
「空」と呼ばれる青い中空は４００年前に奪われ、人類を守るために作られた『この街』には存在していない。

無機質な“空”を見上げた若い男は『情報』にあったビルの前に立ち、この先の展開を思い大きくため息をついた。
「…『雨』とやらが降ればこの渇きも癒せるのかね。」

「空の青」を始め、この世界から奪われた色は多い。
「森の緑」も「海の蒼」も無く、「神様のパレット」と呼ばれたこの世界の色はその多くを濁った灰へと変えた。
この街に存在するのも灰色の天井と壁。狭く、小さくなった世界は外から内を守る殻だ。

「情報によると、飲み水囲ってるマホウ遣いがいるはずなんだけどな。」
ビルの地下へと向かう階段を一歩ずつ下っていく。一切の明かりが無い階段でも男は躊躇することなく足を踏み出していた。

塔暦３５８年現在、外界と呼ばれる“元”世界は人類が手に入れた二つの力によって終焉を迎えたと伝えられている。
一つは自然界に存在しなかったエネルギー『原子力』。
もう一つは存在はしていたのだろうが“人類が気がつかなかった力”――『マホウ』。
力を手に入れた人間が全て力を正しく使うことなどできるわけは無く、徐々に終焉を辿る世界に新たに出現した力を御するだけの余力は存在していなかった。

だが、終焉に抗う人間も少なからず存在していた。
彼らは、マホウを使い世界２０箇所に“塔”を中心とした“方舟”――“街”を作る。
国境も人種も無くなった頃、僅かに残った人類を後世に残すために。自らが壊した世界を浄化するために。

マホウが何故生まれたのか、それを知る術を今の人間は持ち合わせてはいない。
魂に刻まれた情報――“罪”が起こす奇跡。
自らに科せられた罪を知ったとき、人はマホウを手に入れることが出来た。

かつて、方舟と呼ばれた“街”に住む人間は認知の有無に関わらず例外なく罪を持ち、マホウを使うことができる。
人間たちは方舟に乗り込み、マホウを駆使しながら３５０年の後に以前の生活レベルと同等かそれ以上のものを手に入れた。

鉄扉の前に立ち罠が仕掛けられていないか流し見て確認する。
「この先にいるのはどんな“街のはみ出し者（犯罪者）”なんだろうね……っと！」
ブーツの裏で強引に鉄扉を開け、室内の確認もそぞろに男は声をかける。

“街”――“塔”を中心に作られた全三区、十三階層の積層型都市。
旧日本の新都に作られた“街”は“Ｎｏ．３”と呼ばれていた。
２５０年の間増築を繰り返した結果、三層しかなかった階層は十三にもなった。その高さは成層圏にまで達し、上層に行けば行くほど生活レベルは高くなっていく。
そんな街の中で“危険分子”が押し込められた最低最悪の区画、

第９階層Ｍ地区上層旧居住区――現重犯罪者特区。通称“隔離街”。
長い旅路の終わりはＮｏ．３の隔離街から始まっていた。

「水が欲しい…だと？」
「あぁ、そうだ。飲み水をくれ。」
隔離街にある建物。地下一階に相当する部屋で二人の男が対峙していた。
若く、未だ少年の面影を残す男と、脂ぎった顔をした中年の男。
「名前は？」
質問を投げかけた中年の男と眼を合わせないまま若い男は“カイン”と名乗った。
「で、カイン。お前は俺に何をくれるんだ？」
「何もやらん。だが俺はとにかく水が欲しい。三日間一滴も口にしていないからな。」

中年の男はカインの全身を値踏みするように見る。
隔離街にいる割にはずいぶん小奇麗な格好をしている。ブーツに革のパンツ、フェイクファー付のコート。パッと見たところでは大きな解れなどは見られない。
若く中性的な顔立ちの中、異彩を放っている鋭い眼には強い光が宿っている。
濁っていない眼を見るのは久しぶりだ。屈服させてこき使ってやろうか…いい玩具になりそうだ。
中年の男は思惑をそのまま表情に出した様に口元を歪めた。
「馬鹿なこと言ってるんじゃねぇよ。」
「嫌だというのなら実力行使に出る。」
中年の男は薬でもやっているのだろうか、色濃く刻まれたクマに縁取られた眼を細めて笑う。
隔離街では特に珍しくない男の姿にカインはため息をついて諦め

の表情を浮かべた。
「ハハハ！そうだろう？そうこなくっちゃな！それが隔離街でのルールってもんだろ！！」
男が壁に拳を振り下ろすと大きな音と共に壁に穴があく。予想通りの展開とはいえカインは若干の頭痛を感じていた。
「その常軌を逸した身体能力、情報通り『マホウ遣い』って訳か。……はぁ、穏便に行きたかったが、結局あんたもここの人間か。」
「欲しければ力でもって奪え。情けも酔狂も必要ないってな。D地区の一区画を水没させた俺に勝てると思っているのか！！」
重度の犯罪者や危険なマホウの所持者が住む隔離街。ここで15歳以上の殺人経験率は8割を超え、街の法は隔離街では何の役にも立たない。
隔離街に存在する唯一の法は『弱肉強食』の四文字。
生産区であるD地区の一部を水没させたと言うやたら好戦的な目の前の男も、例外ではなかったようだ。

「“Ｙｅｔｚｉｒａｈ”Ｇｅｓｕｎｄｅｓ　Ｗａｓｓｅｒ！――“形成”清廉なる水」

Ｙｅｔｚｉｒａｈ――マホウを形成するためのキーワードが部屋に響く。
個人個人で発現するマホウは違うが、発動するための言葉は同じ。
気がついていなかったが男があけた穴以外にも部屋のいたるところに穴があいており、水が溢れ出していた。
「ただの水じゃないな…穴、水…井戸水か。しかも水量の多い自噴井。いい罪だ。」
「俺が望む限りこの水は涸れないのさ！そして、俺はこの水では溺れない！！溺死ね少年。」
声は聞こえるが、お互いの姿は穴から出る水でかき消され視界に捉えることが出来ない。

水量から見て１０分もあれば水がいっぱいの貯水タンクが出来上がるだろう。
だが、カインは右腕を真っ直ぐ上げ不敵に笑った。
「『水没』、『溺死ね』…攻撃系や操作系のマホウじゃない。この水を『遣う』ことはできない。ただのマホウ犯罪者か。」
握っていた右手を開きながらカインは言葉を続ける。
「そして肝心のマホウは事象発現型。井戸が無ければ、井戸水も生まれない。『形成することが出来ない』。」
「……まさか。」
カインは右手を一つ鳴らし、自らの力を形作る為の言葉を口にする。

「“Ｙｅｔｚｉｒａｈ”Ｄｉｅ　Ｗｉｅｇｅ　ｖｏｎ　Ｋａｔｚｅ――“形成”猫の揺り籠」

カインの指先から細くしなやかな糸が生まれる。
糸は両手五指先全てから生まれ、意思を持っているかのように動く。
膝下まで来ている水を気にすることなく、カインは舞でも舞うかの如く穴と言う穴に糸を編みつける。
全身の動きも合いまり、指先の動きを眼で追うのは難しい程。
「井戸も塞がれたら水が出ない。攻撃手段がもう無いな。」
数瞬の後に穴は全て糸によってふさがれていた。男はマホウを解除していないのだろうが、穴から一滴の水も出ていなかった。
膝辺りまで水が溜まった部屋に残ったのはカインと、さっきより顔色の悪い中年の男。

「わかった！水はやる、だから…」
「ふぅ。命乞いはみっともないが、それでいい。」
若い男が気を解いたのを見て顔に笑みを貼り付けた中年の男が肉

薄する。
「馬鹿が！そんなに甘くねぇんだ――」
気を解いたのはフェイク。ここに長く住んでいると“巣”で“一人の時”以外で気を抜くと言うのは死につながる。この親父はそんな事にも気づいていないのか。
中年の男が言い切る前にカインは思考を巡らし、『フリ』を解くと殺気に満ちた眼に不釣合いな笑顔を向け、告げる。

「そうだよな、コレがルールだ。」

カインの指先が一閃し、部屋に残ったのは水とカイン、糸に絡め取られ宙に浮いている人だった物になった。

Act. 2 ―Der Engel tanzte. “天使舞う日”―

カインは背中に水がたっぷり入った大きなカメを背負いながら大通りを『巣』へと向かって歩いていた。
巣が近くなったところで我慢できずに悪態をつく。
「こんなっ！量のっ！水だとっ！マホウ使いでもっ！息がっ！切れるんだなっ！……っと。」
３０メートルは超えるビルの十階へと身長より大きなカメを背負いながら跳躍する。
この巣において階段を使用すると言う選択肢は存在しない。
エレベーターは機能しているはずも無く、肝心の階段は崩落している。だからこそ巣として機能しているとカインは考えている。
ベランダへと軽やかに着地し、部屋の隅へ背中に背負っている荷物を降ろす。

「容器自体の重さはほとんど無いのに、何で水はこんなにも重いんだろうな……歩いた距離もたかだか１５ｋｍ程なのに。」
背中に背負ったカメは自分のマホウで作り上げたもの。体の一部だからほとんど重さは感じていない。
となると、やはり重いのは“中身（ただのみず）”か――。
マホウで器を作り出し、水を掬い一気に飲み干す。
闘い終わった後すぐには飲まなかったからなと思いながら、喉を通る潤いが全身に行き渡るのを感じる。
「これが生きてるって事だよな…仏さんには感謝だ。手は合わせないけど。」
一息ついたところで、壁に背を預け、ちょうど手の届く所にあった年代物の紙媒体の本「東京ウォーカー２０１１年版」を手に取りパラパラと捲る
「５００年以上前の旧都の事を知る必要はないよな…この辺りのペ

ージから見たこと無い食べ物まで載ってるし。」
最近は栄養剤の入ったアンプルか、錠剤、レーションくらいしか選択肢が無いもんな…。固形食糧でも味がついているだけマシだったんだ。と思いながらページを捲る。
ここ数年まともなものを口にしていないせいか、味の想像すら出来ない。
「環境の変化ってのは想像力も奪うのか。」
外界が存在していた頃の紙媒体の書物を読むのは唯一趣味と呼べるものだった。と言っても同じ本を何度も読むことは無い。内容を覚えてしまうからだ。これもマホウ遣いの基本スペックなのだろう。

幼い頃から『想像』するのが好きだった様に思う。想像の中には実在しないものが存在し、他者の価値観に左右されないものが形を持つ。
ルールに彩られた世界が嫌いなわけじゃなく、むしろ楽な生き方をしたい俺としては大切にしてきたものだった。ルールがあればそれに従えば良い。無いのなら自分の中に暫定的に作り出して生きてきた。
全く別のもの、別の世界として存在している概念、「現実」と「想像」、「規律」に縛られた「自由」が今の自分を作りあげているのだろうと思う。

「部屋は自分を映す鏡か……。」と手元にある本とは関係ない所に飛ばしていた思考を現実へと戻し、４年間を過ごした『巣』を見る。
伽藍とした１２畳ほどの部屋には未読と既読の本が積まれた二つの紙の山と、既読の本を燃やした燃え滓、水の入った瓶が在る。
窓もドアも存在していない部屋を冷たい風が吹きぬけた。
意図してるのかしていないのかは分からないが、隔離街は日中の気温が１０℃前後で固定されている。
太陽の代わりとされている日照照明が消灯される『夜』の時間に

は5℃前後で安定しており、風があるということは最低限空調システムか風を起こすマホウは機能しているらしい。

日照照明が弱くなる『夕刻』に関わらず、騒がしくなってきたのを感じた。燃料用に積み上げてある“既読”の本の山に放り投げ、ベランダから大通りを見ると、まばらに人が歩いているのが見える。

「そうか、食糧配給の時間だったか。もうちょっと我慢が効けばあのおっさんも死ぬ事は無かったのな。」

普段は量が少ないから必要な時に奪う事を繰り返していたが、３ｋｍ先の人が集まっている所を見ると大型のトレーラーが二台。積荷を連結させており、計四個のコンテナがカインの目には見えていた。

自らの罪を自覚し、『形成』、使役する人間を『マホウ遣い』と呼ぶ。

マホウ遣いの普通の人間と違う点は『マホウが使える事』ともう一つ。

『身体能力』である。

視力、聴力、筋力、思考速度、あらゆる点が優れている『人間』を軽く凌駕している。

魂という自らの基礎、罪と言う魂の根源にアクセスできるため、“人間本来”の能力を使用することができる。

脳の９割が稼働していないというのはよく聞く話だろう。その９割はリミッターがかけられているため稼働していないだけなのだ。

リミッターは“安全域”を守るモノ。人間が人間として過ごすのにかけられた制限。

だが、マホウ遣い達は自らを構成している魂を本能的に理解している。情報の塊である魂には“リミッターをはずした状態での限界”が刻まれていた。

よって、１００％とは言わないが本来人間が持つ８０％以上の力を使用することができる。

“罪”によっては身体能力を強化したり、感覚の倍加などもできるため、１２０％の力を使うことができるマホウ使いも存在していると言われている。
カインは３ｋｍ離れた個人の顔を認識することができていた。

「あの量なら多めに配給されていそうだな…」
と次々に出てくる他の人間を見ながらカインはコートを翻し巣のベランダから下へと飛び降りた。

Ｎｏ．３の最低の区画Ｍ地区“隔離街”は最低なりに生活はできる場所だった。
必要最低限、生きるか死ぬかギリギリの量の食料と水は、中区に位置し生産区に当たる“Ｄ地区”から“塔を”通る中央エレベーターから不定期に送られて来ていた。
勿論ギリギリの量だからまともに生きようと思えば奪うしかない。奪い、奪われ、生きて、死ぬ。隔離街の人間を苦しめ、死に至らせるにはちょうど良い量。
徐々に人口が減っていっても良いものだが、配給の量が変わっていなかったと言うことは人口が横ばいなのか、元々そういう政策なのか。
そんな場所では配給一つ取っても混乱が起こることは必至のはずだが、力を持つものが配給を仕切れば混乱も起きない。
力を持つもの、危険分子が集まる隔離街の中でも強力なマホウ遣いの集団が現在の隔離街を仕切っていた。
名を“螺旋の蛇”という。
いつの間にか“螺旋の蛇”と確執が生まれていたカインは配給のたびに一触即発の雰囲気になってしまう。

「まぁ、あれだけでかけりゃ穏便に済ませられるだろうな。」
いつも気まずいのは雰囲気だけで、交戦に至るまでは無かったわ

けだし、とカインは配給車へと歩を進める。
普段配給車は小さなワンボックスの車。“螺旋の蛇”達が目を光らせているため、滅多なことはできない。
だが、今回の配給車は大型のトレーラー。しかも連結式が二台も。
これだけ大規模な配給だと言うのに、配給のたびに目にする“螺旋の蛇”のメンバーは一人もいなかった。
「上からの連絡が無かったか、それとも……。」
カインは僅かばかりの疑問と違和感を抱きながら大通りを進み、配給車へ群がる人垣の一番外側で様子を見ることにした。

違和感は徐々に明確な形を取る。

ピーンポーンパーンポーン

間抜けな放送開始の音がトレーラーから流れる。普段は各所につけられているスピーカーから流れるのだが――。

【ただ今より、『M地区天使特例法』を開始します。】
いつもの配給放送のように、機械的な音声が告げる。
群がる人に疑問符が浮かんだ。
【これは民意で選別された議員8割の賛同を得て可決された法案であり、――】

配給ではないことが分かると「どういうことだよ！」「さっさと飯よこせ！」と怒号が飛ぶ。
普段なら野次を飛ばしている人間を冷ややかに見ても良い所なのだが、今のカインは『法案』と言うワードが耳について離れない。
――これは異常だ。

【――『M地区天使特例法』とはM地区の区画整理となっております。No．3において重犯罪者並びに予備軍を囲えるだけのキャパシティは無くなりしました。】

特例法
区画整理
キャパシティが無くなった

つまり――、

「――おい、まさか。」
誰に言うわけでも無くカインは呟く。
【あなた方は『天使』に『浄化』されることとなります。――最後の旅路に幸多からん事を。】

トレーラーのコンテナが両側面をあげる。
そう、今にも羽ばたこうとしているかの様に。

コンテナの中身は食料では無く、ちょうど人が一人入れそうな箱が小さな機械類を赤く光らせながら並んでいた。
材質や色が違えば棺桶だと知識のある人間は思うだろう。
先ほどの放送を理解していない、聞いていなかった人間は多かった。その内の一人だろう。男がコンテナに上がり、箱の一つを蹴る。
「マジで食料じゃねぇのかよ！」

人が入っていたなら目の位置に当たるか、さっきまで赤く光っていた電飾が緑に変化する。
最初に蹴った男を皮切りに、次々と人が登っていき箱の中身を見てやろうと手をかける。

違和感と決定的な言葉を聞き逃さなかったカインは冷静に観察していた。
言葉の真意に気づき、この場を離れた人間も若干いるにもかかわらず、カインは『法』で起こることを目に焼き付ける為に少しでも多くの情報を得ようとした。

箱にはギリシャ語で『Ｎｏ．９アンゲロス』と書いてある。『使いの者』と言う意味。
英語表記は――『Ａｎｇｅｌ』“天使”

箱を持ち上げ、トレーラーから箱を落とそうとしている者がいた。
力づくでも開かなかったから壊してしまおうと言うことだろう。
だがそれは叶わない。
男の背中から“白い装甲を纏った腕が突き出ていた。”
腕だと分かったのは先に指が五本あったから。
その指が手に持った男の心臓を握りつぶしたから。

男から腕が引き抜かれ、腕が箱の中に消えるとそれを合図にしたかのように全ての箱のドアが開く。
薄いドライアイスで作られたスモークがコンテナから溢れる。
中にいたのは白い人型の機械だった。
顔は装甲でできており、頭部の中央にある隙間を単眼が忙しなく走っている。
機械だと称したのはその体躯のせい。
腕や身体、脚はそれぞれ細く、骨組みのみで形作られている様に見えた。
骨盤に当たる位置と肩はせり出していて、装甲に覆われている。
手は人間のそれと大きさはさして変わらないが、指が長く、指先は鋭い。

背中には機械で出来た一対の翼がついている。――確かに、姿は神話上の天使だ。

各コンテナに6体、計２４体の天使は別の方向へと跳躍する。
降り立った所に舞うのは天使の羽ではなく、血飛沫だった。

カインは起こった事、そしてこれから起こるであろう事を考え、巣へと駆け出す。あの数では地の利を得なければ一方的に殺される。
相手の情報がまったく無い状態で戦うのは勇敢ではなく無謀。しかも相手は２４体。
走るカインの背中越しに「“Ｙｅｔｚｉｒａｈ”！」と声が響く。力で生きてきた人間が集まる所だ。力には力、だが『協力』なんて器用な事ができるはずも無い。
「天使に殺される前にマホウにやられそうだ。」
だが、天使が脅威なのも事実。
「一対一なら余裕だろうけど、とにかく態勢を――」

上空から機械的な音が響く。
過去聴いたことがある。これはプロペラの音か。
一度足を止めて音源を確認する。
「中央の輸送機！？おいおい、どうなってんだ。」
プロペラを四基積んだ大型輸送機が二機宙を舞う。配備されているのは上区であるＳ地区と中区のＤ地区の一部のはず。
輸送機を凝視すると尾翼下に位置するカーゴドアが開き、“箱”を落とす。
箱はパラシュートなどを使わず自由落下していく。
「投下されているのが爆弾なら逃げ切れるんだけど……あの箱も天使入りなのかね。」
カインは空から意識を切って巣に向かって再度走り始めた。
大通りを中心に箱は落とされているのか。

あのように次々と天使が降りてくるのであれば戦わずにすむことなんて無いのだろう。

真上を輸送機が通る。――このままだと早い間に遭遇してしまう。人間じゃない奴を壊すのは難しい。構造が分からないことには急所も分からない。

これから確実に当たるなら誰かが壊した瞬間位見ておくんだった……。

大通りを避け、路地に入り込んだ瞬間、轟音と共に視界が砂煙でかき消される。

「くっ！」

踵を返し大通りに戻ろうと考えたが、カインは気づく。

ココは狭い路地。

相手は一体。

俺のマホウは地の利を得ている。

「――良い機会じゃないか。」

砂煙が薄くなり“天使の箱”が鎮座しているのが明らかになる。

扉部分にはギリシャ語で『Ｎ０．８アルヒアンゲロス』。『卓越した使者』。『Ａｒｃｈａｎｇｅｌ』――大天使。

「“Ｙｅｔｚｉｒａｈ”Ｄｉｅ　Ｗｉｅｇｅ　ｖｏｎ　Ｋａｔｚｅ！」

路地全体に糸を張り巡らせる。

「……さぁ、来い！」

ライトがグリーンに点灯し、空気が抜ける音が響く。

先制攻撃を仕掛けるため、息を殺して箱を見つめる。

箱が開ききった時、急に力が抜けてしまった。

一つ安心のため息をつくが、意識しなおし形成は維持する。

「おい…どうなってるんだ。コレが大天使なのかよ。」

箱の中身は白い装甲も、翼も無く、一人の女の子が入っていた。

Act. 3 ―Er traf sie. “切っ掛け”―

◆

物語と言うのは突き詰めれば変化と言う言葉に集約される。
例えば、ただの少女が王子に見初められたり。
例えば、貧困に喘ぐ少年が魔法の力で富豪になったり。
例えば、曲がり角でぶつかった事で恋が始まったり。
スポーツしたり、ロボットに乗ったり、存在しない店に迷い込んだり。

変化イコール成長と言い換えてもいいだろう。
特別なテーマを持った作品でなければ、物語の登場人物は変化を繰り返していくもの。
人生において人は誰しも『自分がこの物語の主人公』だと思っているだろう。
俺も例外じゃない。
俺の物語は俺にしか作れないし、斜に構えて生きていくつもりは無い。

物語の始まりには切っ掛けがある。
それはほんの些細なものから、世界が変わる天変地異まで。
俺の世界が変化を始める――物語が始まった切っ掛けというのはココなのだろう。

俺は求めていたのかもしれない、そして密かに歓迎していたのかもしれない。
“腐った日常の変化”、“日常を壊してくれる天使”を。

そして期待した。
“天使の箱”に乗って現れた一人の少女に。
なんてことは無いどこかで見たような物語の始まり。
だけど、これが切っ掛けで。
変化が始まった時なのは間違いない。

◆

「んっ！……うーんっ！…うん？」
大天使の箱の中で女の子が声をあげる。
先に見た天使たちは明らかに機械でできていたが、階級が変わると人の形を取るのだろうか。
ブロンドの長い髪に細い体躯。黒いシスターのような服を着ているということは、『教会』の関係者か。
見たかぎり年齢はカインとほぼ変わらない。確かに、容姿は天使の様だ。
翡翠色の眼を薄く開き、狭い箱の中いっぱいを使って伸びをしている。
「あれ？…ここはどこだろう。わっ！あわわわわ。」
目の前に突然現れた人間に驚いたのか、少女は大きく声をあげた。
「…気付いていなかったのか。」とカインは呆れる。
殺気を向けていることに気がつかないなんて、平和ボケした素人か、殺気を受けるのに慣れている玄人か……間違いない、前者だ。
しかし、カインは少女から視線をはずさない。人間か？天使か？
いや、どちらでもいい、攻勢に出れば殺すだけだ。
「ふぅ、ビックリしたなぁ…。もしもーし。」

「……。」
「えーっと、はじめまして？私『エイダ』と言います。すみませんが、ココはどこでしょうか。」
「……は？」
確信した。こいつは天使じゃない。一般人だ。
状況を理解していないどころか、教会の服を着ているということはS地区の上層に住んでいることになる人間。つまりM地区に“いるべきではない人間”。
「……俺はカイン。そしてココは隔離街だ。それじゃあな。」
今は有事。どう見ても面倒ごとにしかなりそうに無い彼女――エイダを連れて回る精神的余裕なんかは無い。
マホウを解いて路地の奥にいけるか確認。箱を飛び越えれば先に進めそうだが、この調子では箱が脳天直撃の可能性も捨てきれない。
もう少し巣に近づいてから、もしくは箱を確認し次第路地に入る、という方針に練り直しカインは大通りへと足を向ける。
「ちょっ！ちょちょちょちょっちょ待ってください！」
焦りからかしっかり舌を噛んだ台詞と同時にコートの裾を引っ張られる。
女相手に力づくで逃げるほど情けない性格はしてないようだな、などと分析半分諦め半分でエイダに顔を向ける。
「何だ？」
「カインさん、私はどこから来たんでしょうか？」
「……覚えてないのか。」
「みたいです。」
「じゃあな。」
「お願いです！助けてくださいよー！」
ほら、やっぱり面倒なことになった。

路地の入り口と上方にカモフラージュをするように色付きの糸を張り巡らせる。
知っていて入ってこないことには気づかれない自信はある。
「とりあえず覚えていることを話してみろ。」
お互いの情報交換をかねてエイダと話をする。
腰を据えて話をするなんて自殺行為だが、これも何かの縁か。と思えれば良いのだが、泣きつかれて留まってしまった自分は単に女に弱いだけか。

聞くとエイダはどうやら記憶喪失らしい。
覚えているのは自分の名前と、言葉、ある程度の知識だと言う。
「今は塔暦何年だ？」
「３５８年ですね。」
「街は何区画何階層？」
「Ｓ地区、Ｄ地区、Ｍ地区の三区画、１３階層です。」
「エイダは何歳だ？」
「１８です。」
「どこから来た？」
「覚えてないです。」
「天使って言葉に聞き覚えは？」
「空想上の天使なら分かりますけど…。」
「あの箱は何だ？」
「さぁ？」
「スリーサイズは？」
「８…ってなに聞いてるんですか！」
基本的な知識は持っているが、最近のことになると忘れている。
先行性か、逆行性か……今の状態では判別できないが、
「部分健忘であることは間違いないな。」
「ぶぶんけんぼう？」

「あぁ、ある程度の知識や名前、言葉を覚えたままの記憶喪失をそう呼ぶ。ある時点から昔のことを忘れていれば『逆行性』がついて、その先を覚えていられないのなら『先行性』がつく。」
「なるほど、なるほど。私、どこでどうしてたかさっぱり忘れてるんだよね……。」
「“どこ”なら推測できる。」
カインはエイダの着ている服を指差し「これは特定の人間しか着ない服だ。」と言った。
「特別な服なの？」
「あぁ、それはS地区中層『聖堂』に住む人間が着る服だ。」

最上区であるS地区は四階層に分けられている。
下から下層『市場』、大層『居住区』、上右層『聖堂』、上左層『伽藍』と呼ばれている。
聖堂と伽藍は“街”の中核をなしていて、聖堂は“塔”を神とした宗教の中心であり、教団の本拠でもある。
街の治安を護る教団直属の『教会六部隊』の本拠地も同じく聖堂に存在する。
エイダが着ている服というのは教団、もしくは教会六部隊に入っている証。

「じゃあ私は教団関係者であることは間違いないわけですね。」
「お前が追いはぎで無ければな。」
帰る場所が分かったところでただでさえ生きるのが難しい隔離街。そして今は“天使”が舞い降りている。マホウを遣えなければ、D地区の下層にも辿りつけないだろう。
“遣えなければ”
「そういえばエイダ、マホウは“遣える”のか？」

この街にいる人間は生まれた時にはすでに“罪”を持っている。

その罪を知覚し、マホウを使用するためにはきっかけが必要だ。
きっかけは生命の危機であったり、学習の成果であったり、街を歩いている最中であったり、人それぞれ。
罪と同様にマホウの使い方も本能的に理解する。
通常２０歳までに罪を知覚する。だが、知覚したところでマホウの発動条件が困難な場合、そのマホウは“遣えない”ことになる。
その為、マホウが遣えない人間も存在していた。

エイダは記憶を探るかのように虚空に目を走らせる。数秒の後にカインと目を合わせバツが悪そうに微笑んだ。
「それが……私“罪”も忘れちゃったみたい。」
攻撃性が低くても、と考えていたが、“忘れた”と来たか。罪を知覚していないということは、“マホウ”も使用することができない。
「……お前、死ぬぞ。」
「だよね。カインの焦り見てると『いつもの』隔離街じゃないみたいだし。」
いつもの隔離街でも十分死の可能性はあるのだが、何も知らない人間に対して危険性を説くのは不可能。
カインは『これから』を思案するも、どの可能性も危険を孕む。
身の安全の為にもここは捨て置くというのが正しい解答かと結論を口にしようとした時、一瞬カインは頭痛を感じる。

正しい解答が良策とは限らないだろう？
求めていたモノが手の届くところに在るというのにそれを見過ごすと言うの？
でも、安全とは限らない。
――力――良い。
――護れ――――い。

――その方法を、もう知っているはず。――

頭痛がしていた時に何か声を聞いた気がする。頭痛が治まったときカインは「はぁ、仕方ねぇな…。」と言いながら心を決めた。

「お前の記憶が戻るまでまでそばにいてやるよ。」

何故かエイダの事を放って“置けなくなった”。

自分の心の動きに驚きながらも、同情や憐憫の類だろうと自らを納得させる。

やり取りをするうちに段々と緊張が解けてきて、エイダには周りを見る余裕が生まれてきた。

ほとんど歳の変わらないカインにも敬語を使うことは無くなったし、今自分が置かれている状況も薄々実感することが出来た。

目の前に立つカインの内側にあるものと同質の力が周りにも張り巡らされていることにも気づく。

だけど何か違う。

カインのマホウと罪。

彼は気づいているのだろうか。

キョロキョロと物珍しそうに視線を動かす彼女を見ると、エイダは路地の入り口に視線を向けた後、カインと視線を合わせる。

「ねぇ、カイン。あれがあなたのマホウ？」

エイダは路地の入り口に張り巡らせてある糸を指差して言う。

「あぁ、そうだ。そんなことより、そろそろ――。」

「――“児戯”。子供の遊びかー。何か似合わないね。」

「子供の遊び？いや、あの壁は俺のマホウの形成状態だ。本来なら……。」

言いながらカインは一本の糸を出してみせる。

“児戯”？ここでは何一つ子供の遊びは行われていない。

「カインの指先から出てるそれ“児戯”なんでしょ？」
どうやらマホウの話をしているようだが、児戯なんていうのは聞いたことが無い。
「いや、俺の罪は“猫の揺り籠”――そんなことより、いや、これも重要なんだが……どういうことだ？」
「見ると分かるんだよね。カインは“児戯”と…なんだろう、コレ。」
「なんだろうって、他にもあるのか？」
「鎖で縛られてるように見えるから中までは分からないけどもう一つあるよ。」
通常一つの魂に一つの罪という原則があるため、二つの罪はありえない。
「そんな馬鹿な。エイダのマホウは“視る”事なのか？」
「分からない。けど――」
エイダが詳しく話そうとしたところで、カインはビルの間に張り巡らせた糸が感じた風の揺らぎに気付く。
「っ！……。」
カインが上を見上げると、カモフラージュの天井越しからみえる宙に広場で見た天使とは違う“二対の翼を持った何かの影”が通り過ぎた。
なるほど、あれが“大天使”か。――なら、エイダは一体…。
異常に気付いたのか、エイダも黙って上を見上げていた。
カインは見上げたままの状態でエイダに話しかける。
「やっぱり覚えていないのか。」
安全を確認して視線を戻す。エイダは一つ頷いた。
「形成もしてないし、分かるのも眼で見えてるわけじゃなくて、理解する感じ。」
「……なるほど。でも残念ながら間違いだ。さっきも言ったが、俺の罪は“猫の揺り籠”。それに、人間は一つの罪しか持てない。」
「うーん、でも……。」

口を膨らませて不機嫌をアピールしているエイダの頭をクシャッと撫で、「いいから、そろそろ行くぞ。」と声をかける。
「一緒に連れて行ってくれるの？」
「元々酷い所だったけど、もっと酷くなってきているからな、知ってしまった以上捨て置けない。」
さっきまでの葛藤が嘘のように彼女を護りたいと思う。
いや、これは使命感のようなものか。

「……ありがと。」
エイダは一言口にし右手を差し出した。
カインはエイダの手を取り、マホウを解除する。
路地の道は“天使の箱”が塞いでいる。
マホウを遣えないエイダを連れて逃げ場の無い路地を行くより、逃げ道の多いところを選んだ方が安全のように思う。
「一度大通りに出るしかないか。」
息を殺しながら路地の入り口から大通りを盗み見る。これで目の前に天使がいたら洒落にならない。
ゆっくりビルの陰から顔を出す。
大通りに人影は一つもなかった。自分達を害するものは無いようだ。
「行くぞ。」
「うんっ！」

カインはエイダの手を引いて走り出す。
自分の判断に何一つ疑問を抱かないまま。
変化の本当の始まり。
久しく感じていなかった人肌の温もりを右手でしっかりと掴み風を切る。
大切なものを一つ増やしながらも、その重さは心地よく、足取り

は軽い。

この時の俺は変わっていくことを自覚しながらも、その変化が“全ての始まり”だとは気がついていなかった。

Act. 4 ―Eine Kiste “正義と悪”―

◆

世界にいる人間はいつだって盲目だ。
自分の信じたもの、知っている世界、つまり常識をもって生きている以上、世界を見るとき必ずフィルターを通す。
見たいもの、見たくないもの。常識、非常識。
つまり人間と言う生き物は経験や知識から繋がる既知の中でしか生きられないと言っても過言ではない。
未知というものに遭遇したところで、『遭遇する』といった事実がある以上、『未知だが既知』と言った事になりうるのだと思う。
本当に未知のものというのは『存在が理解が出来ない』モノに等しい。
理解に至らないと言うことはつまり遭遇したと言う事実ですら適切ではないものに成り代わる。

世界を見ているんじゃない。俺達はいつも俺達を見ているんだ。

常識や事実と言うものは常に眼を曇らせ、時として経験したことすらも歪めてしまう。
ゆがんだ結果、個人としてはそれは全く正しいものへと変化する。
つまるところ、経験と言う身を伴った記憶や知識の一部すらも常識と言うフィルターを通されてしまうのだ。

じゃあ記憶喪失の場合はどうなるのか。
常識の一部が欠落してしまえば、その分純粋に世界を見ることが出来るだろう。

まっさらな状態になってしまえば見るものは全て世界そのものだ。
だが、そこから得られるものは純粋であるが故に、全てが美しく透明だ。
記憶や経験として蓄積されては行くが、そこには正負の感情は存在しない。
あるものをあるがままに受け止めると言うのは少し寂しいことだと思う。

何が正しくて、
何が間違っていて、
何が正義で、
何が悪で。

価値観と言うものがあるから常識に囚われていても世界を感じることが出来る。
人それぞれで譲れないもの。だが、理解や共有は出来るもの。
そうやって個人の世界は少しずつ広がっていく
「価値観の違い」と言う言葉一つで理解を放棄した人間と言うのは歴史的に見ても害悪でしかない。

なら、そもそもの『価値観』が存在しない存在と言うのは、個人の世界にどういう影響を与えるのか。
ただ、人を殺すだけの『殺戮機械（キリング・マシン）』“天使”と呼ばれる存在。『M地区天使特例法』。
日常や生命を脅かすといった意味で存在は悪かも知れないが、その行動、作った人間には『意図』があるのだろう。

意図を理解しようとしたのは“間違いじゃなかった”。
お陰で世界の仕組みと言うのが理解できたから。

何が正義で何が悪かなんて、世界規模の話になっても本当に小さい世界の常識で簡単に決まってしまうものなんだ。

◆

風を切る音は高く、口から出る白い息は一瞬のうちに後方に流れていく。

足は感じる焦燥感から逃げるように地を蹴る。

“今、天使に見つかってはいけない。”

一対一なら何とかなると考えていたが、今度は一人は戦えない二対一。護る戦いは経験したことがない。

自分のマホウは護る戦いも出来るような性質ではあるのだろうが、そういう遣い方をしたことがないのが事実。

奇襲的な攻撃から強襲的な攻撃や、トラップワーク等はすぐに思いつくと言うのに、その戦術にはエイダは存在していない。

他人の動きというのは大きく計算を乱す。相手方なら問答無用で締め上げればいいのだが、そうも行かない。

脳の演算能力を上げ、高速思考をしたところで時間と情報があまりにも少なすぎると言うのもある。だから――。

「出たとこ勝負で何とかするしかないよな。」

「何か言った？」

考え事をしている時に出る独り言に反応が返ってくる。久しくなかった状況に少し頬が緩んだ。

「何でもねぇよ。」

緩んだ顔を見せないようにしながら彼女の耳に届くように声をかけた。

見慣れた景色が増えてくる。
巣の近くに着くと大きく息を吐いた。緊張で呼吸が浅くなっていたのだろうか、深呼吸をすると一瞬筋肉が弛緩したように思ったが気のせいのようだ。
異常は――無い。
「到着だ。ボロで悪いがココが俺の『巣』だ。」
「ここがカインの『巣』？……道端に寝泊りするなんて、隔離街ってホント酷い所ね。」
「……この廃ビルの１０階に――」
巣の下でカインははたと気付く。巣があるのは１０階。階段は１０階まで繋がっていない。――そしてエレベーターは動いてすらいない。
跳躍して巣に戻らないといけないからエイダを抱えて飛ぶ必要がある。体つきを見るに最大５０キロ位と見て問題が無いことを確信する。

そして一つの違和感。
自らの身体能力。“マホウ遣いだから”常人とはかけ離れたものを持つ。ならば――
“なぜ、彼女は自分の全速力について来れたのだろうか”
罪の知覚、認識が出来なければマホウは発現しない。つまり、罪を忘れていると言うことは“マホウ遣いではない”のだ。
しかし、『常時発現型』なら一度発現してしまえば再形成する必要が無いから忘れても問題が無いのか？
それに、忘れていても、一度認識すれば“発現条件が難しいマホウ遣い”となって基本の能力は使えたり…。
いや、でも……。
混乱してきたカインは頭を掻きむしりながら「うーっ」と低く唸

る。

「え、あ、冗談だよ。冗談。」

さっきの自分の台詞がカインを悩ませているのか、冗談が通じなかったのかと大きく勘違いしながらエイダはカインに声をかける。

「でもでも、ホ、ホントに廃ビルなんだね。本の中の秘密基地みたいで素敵――。」

「エイダッ！」

「ハイッ！」

早口で紡がれるフォローの言葉をカインの呼び声が打ち切る。

間髪入れずに返事をしたエイダはカインの顔の見ずに「どうしたのですか？」とビルの柱に向かって話す。

「お前さ、よくついて来れたな。」

「……何の話ですか？」

「俺の……“マホウ遣いの全速力”によくついて来られたな。」

カインと眼をあわすと、カインは思案顔ではあるものの怒ってはいないようだ。

「ほっ」と息をつきながら「ついていくのに必死だったからよく分からなかったけど、頑張ったよ。私。」と返す。

ついて行くのに必死で、でもちょっと楽しくて。そんなことしか覚えていないから、どうだったかなんて伝えられない。

「そりゃ頑張ったんだろうが、頑張ってどうにかレベルじゃないんだ。もしかしたら、マホウ遣いなのかもしれない。」

「うーん、どうなんだろう。」エイダは困惑しながら「忘れてても マホウって遣えるんじゃないのかな？」とカインと同じ考えを口にした。

前例を知らないから、この仮説を試してみるしかないわけだ。

「１０階まで階段が繋がっていないんだ。跳べるか？」

「いつもそうやって出入りしてるの？」

「あぁ。」
「分かった。やってみる。」
「じゃあ、俺が先に行くから、俺を目印に跳んで来い。いいな。」
「了解です。」
エイダの声を聞いて、両脚に力を溜め一気に跳躍する。風切り音と共に景色が下へと流れていく。
頂点に達し、一瞬の静止と浮遊感の後いつものようにベランダへと着地し地上のエイダへ手を振る。
手を振り返したエイダは一瞬の間の後跳躍をする。
軽い着地音と共にベランダへ着地して、エイダはシスター服の裾を押さえた格好のまま「跳べた！」と笑みを浮かべた。
「そうだな、お前やっぱり――。」
マホウが遣えるのかも知れない、といった声はいつの間にか近づいていたエンジン音と上階が破壊される音で掻き消える。
爆発音にも似た大きな音、コンクリートと鉄筋が破砕される衝撃と震動がカインとエイダを襲う。
一瞬にして震動は収まり、残ったのは視界を塞ぐ砂煙と、偶然カインの『巣』で止まった破壊音の原因。
砂煙が薄くなってクリアになった視界にあったのは――『Ｎｏ．７アルケー』と刻まれた“天使の箱”だった。
『Ｐｒｉｎｃｉｐａｌｉｔｙ』――権天使。天使の位階では七番目に当たり、天使、大天使の上位に位置している。下位三隊の最上位。
なるほど、やはり『天上位階論』に倣っているということか、とカインは思いながら普段寝ている所に鎮座している箱を睨み付ける。
『天上位階論』――全ては一なるものから生まれたと言う思想と、存在には階層が存在しているという考え方に基づいて作られた派生

思想。
人が神になるためのヒエラルキア。原初への回帰。位階は秩序であり、知識であり、活動。
上位の存在は下位へと指令と神託を授け、徳を積んだものはさらに上位へと導かれる。
位階は支配の為ではなく、存在が違う為分けられているのだと言う。
この街の構造にも似ているなとカインはシニカルに口元を歪めた。

まだ電飾は赤い。暫しの猶予はあるらしい。
おそらく隔離街――いや、汚染地域の中層や下層へは逃げられない以上、M地区全体が危険になってしまっている状況。
街の柱である塔の内部を通る中央エレベーターに乗って他の区画に逃げない限り、どこに行っても状況は好転しないだろう。
そして中央エレベーターはいつもの警備レベルじゃないのは容易に想像できる。
なら、目の前の障害を排除するのみ。
カインの気配が変化したことにエイダは気がついた。先ほどまで纏っていた不器用ながらも暖かい気配が反転してしまったかのように冷たく鋭い。

それは、明らかな殺意――。

「“Ｙｅｔｚｉｒａｈ”そこから動くなよ。」
砂煙が晴れ、電飾の色は赤から緑に変化する。
マホウを展開しながら肩越しにエイダを見ると心配そうに見つめる瞳と目が合う。カインは口元に笑みを浮かべて「すぐに終わらせる」とエイダに言う。
「分かった……死なないでね。」
「あぁ、当たり前だ。」

カインは“敵”を見据える。エイダをベランダに残し、『形成』をしながら室内へと足を踏み入れた。
ベランダと室内の境、元々窓があったところにカモフラージュ用の“可視”の糸を密度高く編み上げ“壁”を作る。室内から外を見ることは出来なくなった。
これで“天使”がエイダに気付くことは無いだろう。
箱を中心に“不可視”の糸を室内に張り巡らせ天使の出現に備える。
奇襲の準備が整う。呼吸、心拍共に問題ない。身体には高揚感にも似た感覚があるが、戦闘には必要なもの。
箱ごと破壊してしまうことも考えたが、“中身”の強度が分からない以上余計な事はしないほうがいい。
期待しているわけではないが、“もしかしたら”中に女の子が入っていると言う可能性も捨てきれない。

“敵”が人間なら何か意図があり、付け入る隙が生まれるもの。価値観をぶつけ合うことで見えてくるものも少なからず存在する。
だが、機械となるとその意図が隠れてしまい、“ソレ”自体に思惑はない。戦ってもそこに残るのは虚無感と残骸。なんて非生産的な行い。
殺しでも、戦いでも無く、実行する物とそれの破壊。
前者二つには『理由』と『結末』が用意されているが、後者には正義も悪も無い。
良くも悪くも“隔離街の日常”というのは確かにあって、どんなに腐っていようがそれはとても人間らしい事だと言うことを今更ながらに思う。
だが、日常は変質した。
雑念から思考を戻し、箱の挙動を注視する。呼吸一つと共に眼を細めると同時に、箱から空気の抜ける音。

ゆっくりと扉が開き、ドライアイスで作られたような空気より比重の重いスモークがあふれ出す。

“異常”は二度は続かない。

中にいたのは紛れもなく死を運ぶために作られた“天使”だった。

Act. 5 ―Kinderspiel “護る為の力”―

間近で見ると機械であることがよく分かる。身の丈はほとんど差が無いが、肩と骨盤がせり出し、腕と脚、腹部は細い。
色は白く、関節は球体で出来ている。首や、肩部にコードが走っているのが機械である確かな証拠だろう。
広場で見た“アンゲロス”とは若干違う形の頭には赤い単眼が走る。

“アンゲロス”と比べ大きく違うのはその手足と翼。
手には指が無く、代わりに肘部分から一直線で先は鋭利に尖っている。足も同様に膝部分から一直線。正面から見るとちょうど爪先立ちのような格好になる。
翼は三対ついており、内二対は骨組みのみで出来上がっている。残りの一対は移動の補助をするものだろうか、カウリングの中にスラスターの様な物が見えていた。
“アルケー”は俯かせていた頭部を上げ、赤い光を放つ単眼でカインを見据える。

観察しているのか、どう殺してやろうか考えているのか――しかし、どちらでも構わないこと。なぜなら――
「ここは俺の巣。準備は万端……さぁ動いてみろ、一瞬で縛り上げてバラバラにしてやる。」

アルケーが動きをはじめた。しかし、その動きは箱から出たところで停止する。カインは自らのマホウにアルケーが引っかかったことを一瞬確認し、両手十指を動かしてマホウを操る。
両の指は神速で動き、瞬く間にアルケーを縛り上げていく。
糸の強度は十分装甲を破壊できるレベルだということを確信して、

大きく腕を開く。指先についた糸を引くことで締め壊そうと考えた。
――だが、その思惑はもろくも崩れ去る。

引っ張った瞬間、糸の張りが失われた。
原因はアルケーの“両手足”。
全力で引いていたことで、力が行き場を失い、カインはバランスを崩し後ろに倒れかける。
踏みとどまり、一瞬外れた視線をアルケーに戻すと、その両手足をすばやく動かし、箱の周囲に張ってあった“不可視”の糸を断ち切るアルケーの姿があった。
「あの腕と脚、剣になっているのか！」

“アルケー”と“アンゲロス”の大きな違い、それは翼の枚数と、“両手足が剣になっていることだった”。
どうやら、天使の位階というのは装備にも現れるようだ。
上位の天使を見てみないことには分からないが、“殺傷能力”が高い武器を装備している天使ほど位階が高いのではないのだろうか。
純粋な殺傷能力といった点では、アルケーの装備はアンゲロスの比ではない。

スペック自体も大きく違いそうだ、とカインは思いながら、新たに糸を繰り出す。
“可視”、“不可視”を織り交ぜながら、糸はアルケーへと走る。
だが、フェイントなどに臆することも無く、アルケーはすばやい動きで糸を断つとカウルで覆われた一対の翼を開き、姿勢を低くした所で視界から消える。
数歩先で金属がコンクリートを削る不快な音が聞こえると同時に、アルケーを視界に捕らえる。
間は一瞬で詰められていた。

「なっ……！」
動きを眼で追えなかった。一歩半程の距離に突如アルケーが出現したようにも見えるほどスピードは速い。
アルケーの右腕は既に攻撃を始めている。攻撃は不可能、避ける事は出来ない。なら、せめて防御を――
時を止めるほどの高速思考の中で唯一の答えを導き出し、反射にも近いスピードで自らの身をマホウの糸で覆う。
あの斬撃を直接身で受けてしまうとマホウ遣いの回復力でも追いつかないだろう。
アルケーの右腕はカインのマホウを断ち切りながら一閃する。
十重、二十重に編み上げた糸の八割を断つが、カインの身を裂くまでには至らない。
斬撃は防ぐことが出来たが、衝撃を殺すまでには至らず、カインの身体は壁を破壊し隣の部屋まで吹き飛ばされる。
「ちぃっ！」
ダメージを気にしている暇は無い。再びマホウを展開するとアルケーへと放つ。が、甲高い音と共に向かっていった糸は全て断たれた。
そして再びアルケーの翼が起動をし視界から消える。だが、カインはアルケーの動きが分かっていた。
攻撃の為に展開したマホウとは別に、探知の為にもマホウを展開していたからだ。
移動の勢いをそのままに振り下ろされる右腕を掻い潜りながら右肩の関節部に糸を巻きつけながらアルケーの背後へと移動する。
巣にカイン、隣室にアルケーという先程とは逆の立ち位置。
「さて、まずは右腕！」
巻きつけた糸を引くことで関節を締め壊す。肩を潰されたことで、アルケーの右腕は力なくぶら下がるが、アルケー自身の動きは止まることは無かった。

片足を軸にして、コンクリートを脚の剣で削りながらアルケーは反転し、攻勢へと移ろうとする。
さすがというか、やはり機械か……痛みは感じてないみたいだな。と分析しながら、探知の為のマホウを展開する。
同じ手には二度かからないだろうが、視覚が頼りに出来ない分、こうでもしておかないと一方的に殺されてしまう。
接近を感じて、次はよけることに専念する。アルケーに対し、この防御方法は意味を成さない。
右から左への横一閃から、右足のハイキック。左手を地面に突き刺し、コマの様に脚を回転させたところをしゃがんで避けると、翼の推力で姿勢を戻すアルケー。
バックステップで距離をとると、背中に壁の気配を感じる。
部屋の中央にアルケー、カインは壁を背に立っている状況。地の利と言った面では若干不利か。
探知用の糸を張りながらの戦闘。放っている糸に全神経を集中させる。
三度同じ初動、相手が機械であるという事がここで始めて有利に働く。
アルケーが振りかぶるのは遺された左手。右肩に近いところからこっちの首を狙うかのごとく横一閃に放たれる。
（甘いんだよ！）
壁に背を預けしゃがんだ瞬間に斬撃の音と風圧を頭上に感じる。
数本切られた髪が地面に落ちるより早くカインはアルケーの両股関節に糸を巻きつける。
だが、股関節を破壊する前にアルケーの右足が上がり、カインの左脚を突き刺す。
「ぐっ！……は…っ。」
痛みから思わず息を漏らす。
床が削れる音が小さく部屋に響いた。
操ろうとした糸は力を失って垂れ下がる。

いつまでも痛みに集中してるわけにもいかず、右足でアルケーの身体を蹴り飛ばすことで左の足に刺さっていた剣を抜くと同時に痛みに耐えながらアルケーの側面へと跳躍する。

体勢を整えたところでカインは大きな失敗に気がついた。

「なんで、気がつかなかったんだっ！」

敵に集中していたというのは言い訳にしかならない。

元々護りの戦いであることを忘れていたと言うのは事実。

さっきまで背中を預けていたのは壁ではなく“自分で編んだ糸”。

左の一閃でそれは一文字に裂かれた今、この部屋からは薄い光に彩られた夜の時間になった外が見える。

月光を模した光を浴びてエイダが立っているのが“部屋の中から確認できる”。

機械に例外は無い。

例え今日の夕方にM地区に訪れた人間であっても、対象であることは間違いない。

赤く光るアルケーの眼は既に“エイダを捉えていた”。

先の負傷を見ても声をあげまいとしていたのか口を手で押さえ、驚きと絶望を顔に浮かべる。

機械の駆動音と同時にアルケーが動き出す。

今までのアルケーの動きを見る限り、エイダが死ぬまでは一瞬。

「どうすれば助けられる。」

カインは左足の痛みに耐えながら、身体能力、思考速度を最大まで使いながらエイダの元へ走る。

絶望的な距離。

カインは手段を探すのを止めない。

引き伸ばされる体感時間。
だが、距離は埋まらない。
思わず眼を瞑る。
助けられない。
俺はまた――。

『諦めるにはちと早いんじゃないのか？カイン。』
場違いな声に眼を開けると、そこは“巣”ではなかった。

◆

木製の小さな椅子に腰掛けている。
目の前には終わりが見えない一本の廊下。
両脇にあるのは天辺が霞がかって見えない高さの書架。
本の数を確認するだけでも膨大な時間がかかるであろうおかしな構造の“図書館”らしき場所にカインはいた。
瞬きをすると目の前に革張りの赤い椅子に座っている“シルエット”と対峙していた。
ぽっかりと空間に穴があいてしまったような質量を持った“影”。
目鼻などはついていないが、眼が合っていることだけは解った。

『よぉ、カイン。ようこそ、俺達の領域へ。』
「…お前は――。」
『聞きたいことは解ってるぜ。そうだな…まず俺は“無意識”“影”“魂”“罪”“マホウ”そして“世界”だ。』
「それは、“俺の”か？」
『いや、定義できる物じゃない。お前自身は自分のことを真に理解しているかい？何一つ理解できてはいないだろう。容姿や声、性格などお前自身を確立している物はこの世界と同じように酷く曖昧な

物。一個人の考え方で簡単に変化していく物。定義したところで他者の考え方で簡単に揺さぶられてしまう。だから、コレと定義してしまえるものはこの世には存在していない。俺はその代表格と言ったところかな。』
「クオリアというわけか。」
『さてね、定義できないと言っているだろう。そしてココは全てがある場所。時代、時空を超えて記録、保管されている。そうだな、色々な呼び方をされてきたが“図書館”で問題ないだろう。なんたって、この場所は俺達の為の場所なんだからな。』
「で、その図書館に俺が来た理由ってのは何なんだ。」
『呼び出されたと言わない辺り感心したよ。』
「無駄な話はいい、本題を早くしてくれ。幾ら加速しているからとは言え――」
『時間は完全に停止しているから全く問題はない。お前がココに来た理由、それは求めたからだよ。』
影は鎖でがんじがらめにされた一冊の本をどこからともなくカインに差し出す。
『この“図書館”で今のカインが読める本はその一冊だけだ。他には触れることすら叶わない。』
カインが受け取った瞬間、金属音が響き、鎖が解かれると同時に本は消えうせる。
「結局読めないんだが…。」
『カイン、君は“識った”はずだ。さっきの本に書かれていた全ての事象を。“彼女を護る方法を”。』
「だが、あの距離では無理だ…無理なんだ！」
『半端モノの似非マホウ遣いが何言ってるんだ。何もかも使い切れちゃいないんだよ。』
「な――俺は、糸繰りの――。」
言葉を出そうとした時、急に記憶が呼び起こされる。
エイダの言葉。

“――“児戯”。子供の遊びかー。何か似合わないね。”

「まさか。」

『スイッチ入ったか？そろそろ綾取りにも飽きただろう。』

そう、“子供の遊び”が俺のマホウだった。

気がつくと今までやってきたことが全て子供の遊びのように思えてくる。

一側面しか見ていなかったのか――。

『遣い方なんかは気がついた時に“理解”してるだろ？それとも、しっくり来てないか？』

「いや、確かに“児戯”が俺のマホウだ。何で今まで……。」

『その話は今ココですることじゃないさ。さて、お帰りは後ろだ。』

振り返ると両開きの扉が薄く開いていた。

『守りたい物があるんだろう？』

「あぁ。」

『今の俺なら助けられるんだろう？“児戯のマホウ遣い”。』

「当たり前だ。」

カインは扉の向こうへと走り始める。

護りたいものを護る力を身に宿して。

『さぁ！“ルール”と“遊び”は“俺”の“記憶次第”！誤魔化しは効かないが、“天使”と“遊んで”やれ！』

振り返ることなく走るカインは扉の向こうへと消え、両開きの扉も閉ざされ、跡形無く消える。

影は一冊の本を手に取り背表紙を撫でる。

その本は古く、開けばバラバラになってしまうであろう程に痛んでいた。

かすれた表紙には“Ａｉｎ　Ｓｏｐｈ　Ａｕｒ”とある。

顔はないが影は確かに微笑してカインが座っていた椅子を見た。

『“今回”はイレギュラーだらけだ。なぁ、エイダ。』

◆

そしてカインは現実へと意識を戻す。
だが時の流れは依然止まったまま。
カインが真価を発揮してさらに加速しているのに加え、あの異世界の力が若干ながら作用しているのだろうか。
しゃがんで頭を抱えているエイダの前に立ち、左手を振り上げ静止しているアルケー。
カインは右手を伸ばしながらアルケーに近づき、身体に「トン」と当てた。手の平に金属特有の冷たさを感じる。
そして、ごく自然にカインの口からマホウを発動させる言葉が紡がれる。

「“Ｙｅｔｚｉｒａｈ”Ｋｉｎｄｅｒｓｐｉｅｌ・Ｆａｎｇｅｎｓｐｉｅｌ――“形成”児戯・鬼事」

“鬼”であるカインは“子”であるアルケーに触れている。
本当の児戯なら次はアルケーが鬼になるが、これは“攻撃型のマホウ”

文言が響くと同時に時間は再び動き出す。
しかし、アルケーは動きを止めたまま。
身体に無数の亀裂が入っていき、金属を落としたときのように甲高い音を立てながら崩れていった。

金属片になったアルケーを見下ろし、大きく息を吐く。
「つかまれば子は鬼に食われて死ぬ――これがルールだ。」

Act. 6 ―Fragment “悪夢と記憶”―

警戒心はそのままに身体の緊張を解くと膝から力が抜け座り込んでしまう。
安堵は感じているが、先程まで身を包んでいた恐怖から未だに呼吸は浅いまま。
（俺は何に恐怖していた？）
命をやり取りする“戦場”には慣れているつもりだったが、護るというのはこんなにも重いのか――。
貧乏ゆすりのように震える足は感じたことの無い喪失感が与えたもの。あの瞬間、“図書館”に導かれなければ今頃は……。
「……かっこわりぃな。」
ベランダにいるエイダに聞こえないように小さく呟く。既にふさがりつつある脚の傷に落としていた視線を上げ、エイダに顔を向けた。
エイダはカインの視線を感じて俯いた顔を上げてカインと眼を合わせて、恐怖と安堵が同居した表情から力が抜けたように涙を瞳に湛えながら口元に笑顔を浮かべる。
「腰が抜けちゃった。」
「だろうな。」
つられるようにカインも口元に笑みを浮かべて、膝に手を当てながら立ち上がりエイダに近づく。
「大丈夫か？」
「怪我とかはしてないよ……ちょっと立てないだけで。」
「そうか。でも、いつまでもベランダにいるのも良くないな。」
背中と膝裏に手を回し、エイダの上げる小さな悲鳴を無視していわゆるお姫様抱っこで抱え上げる。
「えっと……重くない？」
「あぁ、思っていたほどじゃない。」

「そこは嘘でも『羽根の様に軽いよ』って言うとこ――キャッ」
モノが落ちる音と同時に再びエイダの小さな悲鳴。エイダが言い切る前に呆れた顔をしてカインは両の手を離していた。
「なんで落としますたか！？」
「（……すた？）スマン。急に腕が取れるかと思うくらい重くなった。」
ニヤリと笑いながら「もう大丈夫だろ？さて、寝床を作るのを手伝って欲しいんだが。」と言うカインに頬を膨らませながら「わかりました！お手伝いさせてもらいます！！」と立ち上がるエイダ。
部屋の真ん中に“箱”が鎮座しているから必然的に部屋の隅で寝ることになってしまう。
箱が落ちてきた時に舞った欠片や、天井の穴、アルケーとの戦いの跡を片付け、“取り合えず”寝られる場所を作る。
“綾取り”で天井の破片を払い、“飯事”で破片に意思を持たせ誘導させながら「そういえば」とエイダに声をかける。
「お前、やっぱりマホウ“みたいなもの”使えてるよ。」
「みたいなものってどういうことネ？」
「いい加減機嫌直せよ。キャラがぶれまくってるぞ。」
苦笑しながらため息をついて流れを元に戻す。
「“何”を“どう”形成してるのかわからないから“みたいなもの”。」
マホウは魂に刻まれた“罪”を形作るもの。常時発現型のように、一回発動してしまえば常に具現化されているものもあったり、“児戯”の様に発動条件が複数ある特殊発現型などもあるが、何らかの形を成すといった点では例外は無い。
「でも、俺の“本当のマホウ”を“視た”のは事実だからな。」
「やっぱり、カインのマホウは“児戯”だったのね。」
「あぁ、そうだ。」
「……だったら私は本当に何をどう形成してるんだろう？」

「とにかく『人の魂を視る』とかそれに近いマホウなんだろうな。……そういえば、最初に会ったとき他にも何か言いかけてなかったか？」
「ん？……あぁ！うん。カインの魂って鎖で縛られてるんだけど、その中に厳重に縛られた“何か”が二つあったの。」
二つ……鎖で縛られたと言うと“児戯”の本も鎖で縛られていたが、それは解放された。なら、もう一つは何だ？
「今はどうだ？」
「ちょっと待ってね。」
エイダはカインの胸の辺りをじっと見て一つ頷く。
「やっぱり二つあるよ。」
“児戯”とは別に？」
「うん。児戯と同じ――多分罪の形のもの。中身が見えない罪が一つと、よく分からないけどもう一つ。」
「つまり、俺の魂には罪が二つと鎖に縛られて訳のわからない何かがもう一つあるって事だな。」
その一部を除いてほぼ全てが何らかの制限を受けていると言うことか。
「児戯がはみ出てる部分以外は鎖がグルグルだから、形がチョット見えるくらいだけどね。」
「はみ出てるってどんな形だよ。」
「デス・●ターの凹みが凸版見たいな感じ。」
「そんな前時代の名作よく知ってるな。」
つまり球体である魂から児戯が飛び出していて、その部分は鎖で覆われていない。他の部分は鎖の隙間から薄っすら中身が見えている状態なのだと言う。
「なるほどな……全容はその鎖が阻んでるって事か。」
「鎖って言うか、もしかしたらコレ――」
眉をひそめて小さく呟くエイダ。
「ん？どうした。」

頭を振って「ううん。よく分からないから良いや。」と返す言葉を聞いて、「そうか」と言いながらカインはある程度片付いた床に腰を下ろした。
身に纏っていたコートを床に広げ、「少し休もう。エイダはコートの上な。」と告げながら、感知・トラップ用の“綾取り”を室内に張る。
返事を聞くことなくコートの袖を枕にして横になりもう休むことを自ら示し、遠慮がちにコートの上に横になるエイダの気配を背中に感じながら深い闇の中に意識を落としていく。
今まで感じたことの無い緊張感から解放された反動と、久しく感じていなかった“敵ではない人間”の気配に安堵のせいか、夢を見る程に深く落ちるのに時間はかからなかった。

◆

俺は元々S地区に住んでいた。
古い記憶の為か、その詳細は酷く曖昧で、おぼろげな輪郭と微かなディテールで構成されていた。
両親と弟がいたこと、仲の良かった友達がいたことだけは確かに記憶に残っている。
“学院”と呼ばれる一般教養とマホウの遣い方を教える施設に通っていたのも間違いない。
初めてマホウが遣える様になったのもその頃。
教育機関に行っていたのだから、遣える様になって然るべきとも言えるか。
２０歳までに確実に開花するマホウを早く会得し、正しく遣える様に訓練する為の機関。確か、そんな感じ。
その実態は闇の研究機関だった、なんてことは無く、至って平凡な学校。マホウ発現・実践という授業が無ければ塔暦以前、旧時代の学校となんら変わりない。

陰謀的な部分を無理矢理探し出すとすれば、『有能な人間は年齢に関わらず教会六部隊にヘッドハンティングされる』といった所か。

カースト的にも、治安的にも最上位のレベルにあるS地区に住んでいた俺。そんな俺が何故隔離街にいるかというと、その辺りを思い出そうとすると急におぼろげな輪郭すら失ってしまう。

つまるところ“記憶から抜け落ちている”という事。

さぞかし辛かったのだろう。

トラウマで記憶を封じてしまったのだろう。

まぁ考えられる要因は幾らでもあるけれど、ハッキリした理由という物は思い出さないわけには解るわけが無い。

S地区にいたであろうエイダと出会ってしまったせいだろうか、自ら封じてしまっているのかもしれない記憶の一片を手繰り寄せようとしている自分がいることに驚く。

そんなことをしようものなら、汗まみれで眼が覚めるというのは経験で解りきっているというのに。

だけど、夢というのは意図の有無に関わらず再生されていく。

「カイン！君の“マホウ”は――――。」

「なんてことだ！塔が――――。」

「――を捕まえろ！」

「カイン！カイン！ねぇ、あの子が何したって言うのよ！」

「あの少年はクラスA以上の攻撃特化マホウを有しています。S地区にいるべきではない存在、」

――危険分子なんですよ。――

「M地区へ連行しろ！」

「お母さん！お父さん！」

あぁ、やっぱりこのシーンか。
起きたら忘れているけど、見ると何度も見ていたことを思い出す夢。
そしてこの後はいつも脈絡の無い続き。
本でしか見たことの無い“夜空”と“星”が視界を覆う。
横に視界が移動していき、倒れ臥す人影に焦点が合う。
「……――。」
人影は微かに笑い、その身体から命を零す。
自らの身体に力を入れることは出来ず、近づく事は出来ない。
自分の身体からも命が失われるのを感じながら、俺は泣く。
声をあげることも出来ず、ただ涙を流す。

そうして、喪失感と虚無感に支配されたまま、眼が覚めるまで夢は延々と繰り返される。
俺が記憶を失っている事を責め立てるように。
この夢に救いは無い。

――俺は、何を忘れてしまって、何から逃げ続けているんだ。
自らの夢の中で問いかけても、解を与えてくれる者は居ない。
だが、目覚めという名の一時的な救いはもたらされた。
『自然に』ではなく、『やや強引に』。

◆

エイダは横になり眼を瞑ったものの、眠りには落ちていなかった。
緊張や心配から来た疲労はあるものの、考えることと不安が多す

ぎて眠りにつけないという典型的な不眠。

カインを一目見たときに感じた安心感をはじめとした不思議な感覚のこと。

そもそも、自分があんな箱に何故入っていたのか。

今、M地区を襲う天使と呼ばれるロボットのこと。

そして、自分の記憶の事。

不思議なくらいに“過去”というものが綺麗に抜け落ちている。

一番不安なのは『自分は本当に自分なのか』という事。

過去がないということは自分を構成している物の9割が無いということになる。

知識やそこから連なる発想というのは“今”の自分を構成するには心許無い物。

最も重要な“過程”がないというのは自分の存在を酷く曖昧なものにしてしまうのに十分だった。

寝返りを打つように身体を動かし、カインの背中へ視線を向ける。

身体の動きはほとんど無い

（まるで死んでいるみたい。）とエイダは思い、少し不安になる。

微かに上下する肩と、時折口から漏れる声から不安は解消されるが、夢見が悪いのかもしれないと次は心配をしてしまう。

なぜ、こんなにも彼の事が気になるんだろう。

何の得にもならないのに「護る」と言ってくれた彼。

その背中へ手を伸ばし――触れる直前に気配を感じてベランダへ視線を移す。

視界に入るのは月光が射す夜の闇を切り取った四角い窓と、アルケーの残骸。

そして数瞬の後に気配の原因だろう、月光を背に浴びた黒い影がベランダに舞い降りる――かと思ったら、着地の衝撃でベランダが

壊れる。
「ッ！」
「っ！」
エイダの声を殺した悲鳴と同時に息を呑む音が聞こえたのは気のせいではないはず。
轟音とベランダだった部分、そして野太く長い悲鳴を引き連れ黒い影は視界から下方へと消える。
エイダの脳裏には不安や心配の代わりに、落ちて行く影――ガタイの良い男が浮かべる哀しそうな表情が焼きついていた。

深い眠りに落ちていたのに眼が覚めるほどの轟音が響く。綾取りに動きを感知させる必要などないほどの衝撃が目覚ましになった。
カインが眼を開くと起こそうと身構えるエイダが視界に入る。
「どうした！何があった！？」
尋常じゃないほどの轟音。さっき天使の箱が落ちてきた時と同じくらい酷い。
「…まさか、もう一つ天使の箱が――。」
「イヤ、ソレハナイヨ。」
エイダは苦い顔をしながら、やや食い気味に否定した。
「……どうして言い切れるんだ？」
「とりあえず綾取り解いて。下見れば分かるから。私はオススメしないけど。」
カインの心配をよそにエイダは呆れた声で指示をする。疑問は尽きないが、真相を知っているのはエイダだけ。形成を解除して、腰を上げる。
「ふっ、このベランダが！軟弱な奴め！！」と言う声が窓の下から響く。これは、間違いなく人間だ。だとしても安全を確認しなければならない。隔離街には敵しか居ない。
寝床からベランダに向かって一歩足を踏み出した瞬間――赤い模様が入った茶色い球体が窓の淵から覗く。位置的にベランダの床部

分から生えている計算になるのだが…。
「フハハハハ！！確認するまでもないぞ！久しぶりだなカイン！ちゃんとプロテイン飲んでるか！？」
頭から血を流している大男が窓から現れた。
そして時間が完全に止まる。カインとエイダは声が作った残響が消える頃にようやく現状を把握した。
この部屋にはカイン、エイダ、箱、スクラップ、そして謎の男。
……お前誰だー！！
と叫びたくなるのをなんとか堪えた。
しかし男の台詞に一番の違和感を覚え、カインはエイダを背に隠しながら思案をつづける。
「久しぶり？って、カインの知り合い？」
エイダも同じ事を疑問に思ったのか考えていたことを尋ねてくる。
褐色の肌に巨大な身体。身長は２m近くあるだろう。左手はエイダの腰ほどもある。右手は機械化義手で、手のひらに当たる部分には何故か拡声器がついていた。この寒さの中Tシャツを着ている。足元はだぼっとしたズボン。
そしてそのTシャツはワンサイズ小さいのか、鍛え上げられた胸筋だけでなく、腹筋までもがしっかりと形を浮かべている。
こんな知り合いがいたら忘れたくても忘れられない。
「ん？覚えちゃ……おぉ！そういえば自己紹介からだな。俺の名前は『サムソン』。“螺旋の蛇”で採掘班と配給班のリーダーやってるんさ。お？嬢ちゃん細っこいなぁ。ちゃんとプロテインのんでるか？」
近づかれてもいないのに、エイダは一歩身を引く。目の前には血を頭から流しながら、プロテインの事を話す男。

普通に生きてきたなら、絶対に出会わない・出会いたくない人間だとエイダは思っていた。

Act. 7 ―Caduceus “螺旋の蛇”―

“螺旋の蛇”は混沌とした隔離街に複数存在する組織の一つ。
構成員は全員“強力なマホウ遣い”。
その圧倒的な力と組織力、リーダー『モレク』の持つカリスマ性に惹かれた人間たちで作られている。
マホウの技術と精度、応用力についての教育も行っていると言う隔離街では異色の集団。
配給の主導や、過去の技術や遺産を提供していることから、名を知らないものは居ない。
その圧倒的統率力と能力と言うのは隔離街、M地区だけで無く、S地区の上層部も知るところであり、危険視されているともっぱらの噂だ。
カインは気がついた頃から『なぜか』“螺旋の蛇”に敵視されていた。襲われると言うことは無かったが、街ですれ違うだけで殺気を向けられるため、“螺旋の蛇”主導の配給には行った事が無いから、やはりこの男は一度も見たことが無い。
「で、“螺旋の蛇”の幹部様が俺に何のようだ？」
恐怖ではなく、何故か嫌悪感を放つエイダを背中に感じながらサムソンと名乗った男に殺気を向ける。
「そんな怖い顔すんなよ、カイン。」
「見ず知らずの人間に良い顔できる程、良い環境で生きてこれなかったんでね。」
サムソンは少し悲しげな顔をして大きく溜息をついた。
「はぁ……ホントに覚えちゃいないらしいな。」
カインの反応を見るが特に変化は無い。つまる所“赤の他人”と『思われているのだろう』。
「しかしなぁ、ほぅ。さすがリーダーのマホウだ。衰えを知らないのはマホウも一緒って訳か。」

関心と感心からサムソンはカインの周囲をグルグルと見る。サムソンの動きにあわせ、エイダを背にしながら身体を動かす。
三週もしたところでエイダが我慢できずに口を開く。
「あの！うちのカインに何か用件ですか！？」
「……うちのって。」
サムソンは一時停止でもしたかのように足を止め申し訳なさそうに頭を掻いた。
「お、おぉすまねぇな――えぇと……」
「エイダです。」
サムソンは歯をむき出しにしてニカッと笑い、「エイダちゃん、大切な用事なんだ。」と言ってカインに視線を合わせる。
「カイン、リーダーがお呼びだ。」
「『リーダー』……あの『不老のモレク』が？」
「あぁ、そうだ。訳がわからないだろうが、とりあえず着いてきてくれ。」
「嫌だと言ったら？」
「命令に違反しちまうが、首だけでも届けさせてもらうわい。」
笑みの質が変化し、体感温度が一気に下がる。そしてサムソンの視線はカインの背後へと注がれる。
汗が額に一筋の道を作る。
連れて行くにはどんな手段も選ばないのか……。抵抗は無駄、と言うわけか。
視線をサムソンから外して、エイダを見る。エイダはカインと眼を合わせて一度頷いた。
「一つ条件がある。」
「幾らでも聞いてやるぞ！さぁっ来い！！」
サムソンの勢いに若干気圧されながらカインはエイダを自分の隣に並ばせる。
「エイダが一緒でも構わないか？」
「！子供（ガキ）が成長するのは早いんだなぁ…俺も歳取るわけ――」

「構わないか？」
サムソンのペースに巻き込まれないように話の腰を折って再度聞く。
「もちろん！一緒の方が何かと都合が……いんにゃ何でもねぇ。内容は詳しくは話せねぇが、残念ながら筋トレじゃあ無いらしいぞ。」
嬉々として部屋を出ようとするサムソンに聞こえないようにエイダと小声で話す。
「……なぁ、色々と間違えた気がするんだが。」
「……うん。でも選択肢が無いんだから間違えようが無いよ。」
ハァと二人で溜息をついて、サムソンの背中を見る。どこまでがネタなのか計り知れないが、強者揃いの“螺旋の蛇”で幹部をやっていると言うことはやはり実力者なのだろう。

「どうしたぁ？二人とも、とっとと行くぞー。」
朝の時間がやって来て薄明かりが外から差し込む。
意識していなかった、というか忘れていたのだが、実力者であろう“螺旋の蛇”幹部が、何故流血するほどの怪我を負ったのかカインは今になって気になり始めた。
「そういえばアンタ……サムソン。」
「お！？どうしたカイン！何か思い出したか？」
「いや、何も思い出してはいないんだけど……なんで怪我したんだ？」
後ろで噴出す音とクツクツと笑いを堪える様な音が聞こえる。どうやらエイダは“瞬間”を目撃したらしいが……何故笑っているのかはわからない。
窓の淵に足をかけながらサムソンは空に眼をやり、気まずそうに口を開いた。
「そのー、何だ。ベランダが軟弱な奴だったんだ。俺のグレイトフルボディに――」
「要約すると。」

「壊れて、落ちた。」
「……おい、まさか。」
カインは窓際に走りより、経緯を悟った。あの激しい衝撃と音はサムソンの着地した時に、ベランダが壊された衝撃と音。１０階から落下しての流血沙汰。
元々巣への入り口であったベランダがあったところには僅かばかりの名残しか無かった。
こめかみを押さえ、サムソンに何か言ってやろうと視線を向けると、サムソンの姿は既に無く、下に逃げた後のようだった。
「ったく、バカバカしい。」
「サムソンさんが来たときの慌てっぷりの事？」
エイダは隣に並んで意地悪く微笑んだ。
「あぁ、そうだよ！っとついて行かないと首だけになっちまう。ほら、行くぞ。」
「えっ、ちょっと待っ――」
からかわれた仕返しにとエイダの腕を引っ張り、２秒ほどの自由落下を始める。着地の瞬間にマホウを展開して衝撃を殺す。
無事着地をした後、乱れた髪を手ですきながら、エイダはその顔に怒りを表していた。
「もう、いきなりはやめてよ！」
「あぁ、善処するさ。」
カインは笑いながら、むくれるエイダの頭を撫で、サムソンの巨体を捜す。あの巨体、見失うはずが無いと思ったが…。
「カイン、笑顔が増えたなぁ。ええこっちゃ、ええこっちゃ。」
声が聞こえる方向へ首を巡らすと、地面から生えている茶色い半球。サムソンが鼻から上を覗かせてニヤニヤと笑っているのを見つける。
「ほらー、お前ら行くぞー。」
声を響かせながら手を振り始めたため、二人は「シーッ」と唇に人差し指を当て周囲に気を配りながらサムソンの元へと駆け寄る。

サムソンが居たのは直径2メートルほど、深さは上から確認する限り4メートル強。
風が抜けているところを見ると横穴が繋がっているのだろう。
巣のすぐ近くにあったというのに、サムソンが来なければ気がつかなかった大きな入り口。
「すごいな。コレもマホウか。」
穴から這い出してくるサムソンに声をかける。
「あぁ、否定はしねぇよ。こいつのお陰で本部は天使とは無縁だ。」
今の所、な。と続けるサムソンの行動と言葉から考えると、万能ではないにしろ、認識をずらす作用があるのか、それとも迷彩（カモフラージュ）か…カインの思考はどこからか――だが確かに近い距離から響いてくる爆発音でさえぎられた。
「カイン、サムソンさん、急がないと。」
エイダの表情に焦りの色が浮かぶ。笑みを浮かべていたが、険しい表情へと変化したサムソンと一瞬視線を交わし、「先に入りな。ほら、エイダちゃんも。」という声を聞き、縦穴に飛び込んだ。
案の定、縦穴からは横穴が延びていて、等間隔で電球のようなものが光っている。横穴は高さが2．5メートルほど。
観察と確認を一瞬で済ませ横穴に身を入れるとエイダが降りてくる。
サムソンが降りてきたところで縦穴から落ちてきていた外の明かりが途絶える。入り口が閉じられたのだろう。
「ささ、明かりはあるし一本道だから道なりに進みな。一応足元には気をつけてな。」
一般のトンネルのように半円状ではなく、チューブ状の通路。それは蛇の腹の中をイメージさせた。材質はゴムかリノリウムのようなもの。慣れたコンクリートやアスファルトとは違う滑らかな材質にどことなく不快を感じる。
「サムソンさん、この明かりもマホウ？」
「半分正解だ、エイダちゃん。正確に言えば発電機を動かしている

のがマホウなんさ。俺はサイクルマシンでの発電を提案したんだが相手にされなかったな。」
「当たり前だろ…それよりそんな話しても大丈夫なのか？機密とかじゃ。」
後ろで大きな鼻息が一つ聞こえた後「コレくらい話したところでどうにかなるような組織じゃないわい」と誇らしげな声が聞こえた。
トンネルを作ったのもマホウ、それを隠すのもマホウ、そして維持するのもマホウを使っていると言う。
強力なマホウに加えて応用力を鍛えているというのは侮れないものだとカインは感じた。
２０分ほど歩いただろうか、通路の先に強い光が見える。外の明かりとも若干質が違う光。
「サムソン、あの光が出口か？」
「おぅ、そうだ。“螺旋の蛇”の本部で、秘密基地だぞ。」

薄暗かったトンネルから出ると、光に目が焼かれる。明順応するのに一瞬の間を要した。
慣れた目に飛び込んできたのはどこかのビルのエントランスのような所。そしてトンネルの脇に一人、見張り役の人間だろうか。時々こちらに視線を向けながらサムソンに話しかけている。正面には二箇所変わった装飾が施してあり、見回すとカイン達が出てきたようなトンネルが複数存在する。それぞれのトンネルに一人人間が立っていた。
全てが先程通ってきたのと似たような通路なら、隔離街のどこからでも突然現れることが可能になる。
窓が無い所を見ると、どうやらまだ地下なのだろう。
話を終えたサムソンが辺りを見回している二人に声をかける。
「悪いな、二人とも。ちょっと野暮用が出来ちまったから、ここでお別れだ。案内役が来るからちっと待っててくれや。」
カインとエイダが頷いたのを確認するとサムソンはニカッと笑っ

た。
「まぁ、ひょろっこい奴だが頭は切れるから問題ねぇ。カイン、エイダちゃん、また後でな。」
サムソンが左手をひらひら振りながら正面右側の装飾に向かって歩いていくと、装飾が左右に真っ二つに割れる。どうやら自動ドアだったようだ。チラリと見えた限り、小奇麗な廊下が真っ直ぐ伸びていた。
装飾が元に戻りサムソンの背中が見えなくなったところでエイダが口を開く。
「なんだか凄い人だったね。いろんな意味で。」
「あぁ、そうだな。」
一息ついて、見張りの少年に話しかけようとした所で、装飾が開く音がする。サムソンが出て行ったのとは逆の左側の装飾が割れ、人影が見えた。どうやら正面の装飾は左右共に自動ドアらしい。
扉の向こうからは、細身の体躯でカインと同じくらいの身長、そしてメガネをかけた青年が現れた。年齢はカインの少し上だろうか。
青年が現れた瞬間、見張りの少年達が一斉に敬礼をする。青年が手を振り、敬礼を解かせる。
エイダは統率された動きを見るのは初めてなのか、感心したように周囲を見回していた。
カインも実際に見るのは初めてだった。一瞬言い表し様の無いプレッシャーを感じた。
まっすぐこちらを見据えて歩いてくると言う事は、彼がサムソンの言っていた“案内役”なのだろう。
「久しぶりだねぇ、カイン！あの泣き虫が女連れとは良いご身分じゃないか…と言っても覚えていないのか。はじめまして二人とも。僕は“螺旋の蛇”の参謀役『イサク』だ。」
「あ、あの私エイダと言います。関係ないのに着いてきちゃってすみません。」
「君がエイダか。うん、情報は入ってるから何の問題もないよ。」

カインの方を見て少し安心したかのようにメガネの奥で眼を細めるイサク。
親しい友人に送るような眼差しに軽く動揺しながら、カインは疑問を口にする。
「アンタも俺のことを知ってるのか？」
「随分他人行儀な呼び方するね。そうだな、敬意を込めてイサク様で良いよ。」
“螺旋の蛇”には変わり者しか居ないのかとカインは溜息をつく。
「……イサクも俺のことを知ってるのか？」
「んーまぁいいか。その辺りの詳しい事は、僕の口から話す事じゃないんだ。二人とも、とりあえずリーダーに会ってもらうよ。積もる話はその後。」
「『不老のモレク』に聞け、と言う事か。」
「端的に言えばそうなるね。」
ならば、これ以上言う事はない。疑問もそこで全て明らかになるのだろう。
「私が着いて行っても大丈夫なんですか。」
「もちろん。エイダも一緒に来てくれ。それにその方がこちらとしても“都合がいい”しね。」
イサクは二人の顔を見て、他に質問がないことを確認して「じゃあ、こっちだ。着いてきて。」と先程でてきたドアに向かって歩き始めた。
右側のドアと違い、左側のドアの向こうはすぐに行き止まりだった。イサクが突き当たりの壁についているコンソールを触ると、ドアが閉まり浮遊感を感じる。
コレはエレベーターだったようだ。動き始めて感じた浮遊感から下りていっているのがわかる。
地下二階を過ぎたところでイサクが振り返って話を始めた。
「この施設は地下7階まであるんだ。地上は2階で、さっきいたのが地下1階。これからリーダーのいる5階まで降りるよ。」

「やっぱり、リーダーは動かないんだな。」
「それが“組織”と言うものだよ。カイン。」
「あの、“螺旋の蛇”ってどれくらいの歴史があるんです？」
「話を聞く限り、１００年は確実だよ。リーダーの口を割らせれば――」
「――詳しく聞けるかもね。さぁ、到着だ。」
乗り込んだ時とは違い、イサクの正面の壁が二つに割れる。エイダは感心したように『入口』と『出口』を交互に見ていた。
『出口』の先には少しばかりのスペースと無骨な鉄の扉が一つ。他はコンクリートの壁と床、天井しかなく、“リーダー”が扉の先にいるのは明らかだった。
イサクはカインとエイダに振り返って一つ頷くと、扉をノックした。
「イサクです。サムソンに代わり、対象を連れてきました。」
【鍵は開いてるぞ。】
マイクを通した声が響く。どこかにスピーカーが埋め込まれているのだろう。
「失礼します。」とイサクが扉を開けた後、そのまま身を扉に寄せ「さぁ、入れ」と手招きをする。
カインが先に部屋へと入り、エイダが入った後で扉は閉められた。広い部屋の中には机とソファが一組、そして本棚が一つある。広さの割りに調度品はごく少ない。机の向こうには３０代位の男が座っていた。
「そんな所に突っ立ってたら話しづらいだろ。」
椅子に座っていた男が立ち上がり、部屋の中央においてあるソファに腰掛ける。身長は１８０ｃｍほど。ポンチョを身に纏っているから体型は分からない。ゆるくウェーブがかかった銀髪は肩にかかるほどの長さ。男は対面のソファを指差しながら、藍色の瞳でカインとエイダを見た。
「二人ともそこに座れ。イサクは…私の隣に座るか？」
「いえ、僕は立ってます。」

「そうか」と男は一言言って、イサクに向けた視線を二人に戻す。
「久しぶりだな、カイン。…いや、『はじめまして』か。話は聞いているぞカイン、そしてエイダ。」
カインとエイダは顔を見合わせる。また“久しぶり”だ。
「私は“螺旋の蛇”のリーダー『モレク』だ。こう見えて年齢は３００を越えている。」
詳しい年齢を言えないのは２００を越えた時に数えるのをやめたからだとモレクは笑う。
３０代、もしくは２０代後半だと思っていた、リーダー・モレクの年齢は予想の遥か上だった。
「『不老のモレク』……ね。」
どう考えても人間の年齢ではない。二人は黙ってモレクの話に耳を傾ける。
「今回、お前らを呼んだのは“カインに”仲間になって欲しいから。そして――。」
そして一つ頷くと小さな悲鳴が隣から聞こえた。カインは首を巡らすとイサクがエイダを拘束していた。
「お前っ、何を！」

「そして、カイン。お前の秘められた力をを開花させる為だ。」

「……秘められた……力？」
カインがモレクに視線を戻すと、モレクが口を開いた。
「そう、それは形成の先。それは魂に刻まれた罪ではなく、今生の個人の力。さて、下準備その二だ。私が“封じた”記憶よ、再生を始めろ。」
モレクが指を一つ鳴らすと、“今まで思い出せなかった記憶”が一気に流れ込む。
「っ！」
記憶の奔流に抗いながらカインはモレクを見据える。

「…あんた。」
「思い出せたか？なら、現状とエイダについて説明は不要だな。」
全て思い出した。そして、こいつらは何のためらいもなくエイダを殺せる。
結果の為なら手段を選ばない。俺はそう“教えられた”。
思案の末、足元に視線を落とすとモレクの影が足元まで伸びている。
――ならば…まずは、モレクを拘束してやる。
「“Ｙｅｔｚｉｒａｈ”Ｋｉｎｄｅｒｓｐｉｅｌ・Ｄａｓ Ｓｐｉｅｌ ｄｅｓ Ｓｃｈａｔｔｅｎｓ――“形成”児戯・影踏み」
文言が部屋に響くが、カインのマホウは“発動しなかった。”
この部屋ではカインの文言と重なるようにもう一つの文言が響いていた。

それはモレクの文言。
モレクはソファに身を埋めた状態で腕だけを上げカインを指差して文言を口にした。
「“Ｙｅｔｚｉｒａｈ”Ｋｅｔｔｅ・Ｋａｒｍａ――“形成”封・マホウ“封”が罪の私を封じようだなんて甘い考えだ。一撃必殺が多いとは言え、“児戯”の欠点は詠唱が長い所だな。」
モレクのマホウは“封じる鎖”。カインのマホウはモレクが“鎖”を解くまで使う事ができない。
「解っているだろう？『戦わなければ、エイダを殺す』。しかし、お前の牙は“封”じられた。」
口の端をニヤリと歪めモレクは言い放つ。
「二人死ぬか、一人死ぬか、それとも隠されし爪で私とイサクを殺

しにかかるか…さぁ選べカイン！」
　カインは拘束されているエイダを見、エイダの両腕を掴んでいるイサクに視線を移し、歯噛みしながらモレクを見据える。
「そんなもの決まっているさ。――“親父”と“兄貴”だろうが、俺は容赦しない。」

Act. 8 ―Crybaby“解き放たれた記憶”―

――形成は使えない。“親父”のマホウなら万に一つの可能性も無いだろう。

だが、カインはモレクがこれ以上“封じる”事ができなくなっていることも思い出していた。モレクのマホウはその強い効果の裏に一つの副作用が存在する。

それは『封じた対象は自らも封じられてしまう事。』

今、モレクはカインのマホウを封じている。つまり、モレク自身もマホウを使用することができないのだ。

「だけど――。」

この部屋にはもう一人“超攻撃型のマホウ遣い”がいた。“兄貴”イサクだ。

イサクのマホウは“燃焼”。物を燃やす帯を形成することができる。

視界内に入っていることで攻撃の対象になってしまい、帯に絡めとられると触れた部分が燃え始める。だが、未だに攻撃をしてくる気配は無い。

「あ、心配しなくても良いよ。僕は手を出さないから。」

カインがチラリと見たことに気づいたのか、顔に笑みを貼り付けながら言う。イサクはさらに続けた。

「弟分にせっかく再会できたのに自ら手を下すつもりは無いよ。まぁ、リーダーはどうするか知らないけれどね。」

イサクは言葉の通り一歩下がって目を伏せ、右手で捕らえているエイダにだけ聞こえるように呟く。

「捕らえておいてこういうのもなんだけど、大丈夫。このままだと、君もカインも死なないよ。」

「えっ？」

驚きに目を見開きながら、エイダはイサクを見る。
「でも、リーダーは……。」
「あれは、カインを焚きつけるために言ってるの。“この力”は心を糧にする。使おうと考えなければ応えてくれない。」
その状況を演出しているだけさ、と言いながらイサクはにらみ合いを続ける二人を見た。
「手は離すけど、しばらくの間後ろ手に組んでおとなしくしといてくれるかい？……まぁ、これは『お願い』じゃない『命令』だけどね。生死を選ぶくらいの自由意志はあげるよ。」
「……わかりました。」
両手の拘束がはずされる。今考えるとそこまで強く掴まれていなかったのだと思った。
手を後ろ手に組んだまま足元に視線を落とす。イサクに話しかけるでもなく、エイダは自分に確認するように一人呟く。
「カインのもう一つの力――やっぱりあったんだ。」
「なんだ、エイダは知っていたのかい？」
「いえ、視たんです。私、人の魂が視えるみたいなので――あなたの罪は“燃焼”ですね。でも、罪じゃないものがもう一つ…。」
ほう、と感心した表情を浮かべ、イサクは頷いた。
「そうか。なるほどなるほど、詳しくは見ないで欲しいな。ん、それが君のマホウなのかな……じゃあ、カインの“罪じゃないもう一つ”は見えるかい？僕らも知らない彼の“願い”が。」
「罪とは違うんですか？カインには……。」
「罪とは違う。“それ”は魂に刻まれた情報ではなく、魂を持つ今生の“個人”が紡ぐ“願望”だ。」
エイダはすぅっと眼を細めてカインの方を見据える。
モレクの封の鎖に囚われた“児戯”が視え、その罪に隠れもう一つの“何か”が存在していた。
児戯に覆われていた“カイン”がカタチを一部覗かせている。今ならはっきりと視える。そう、彼の中に“願い”は確かに存在して、

脈動をしている。
そして、イサクも言及しなかった、カインが持つ“もう一つの罪”も。
「あれは、――。」
イサクとエイダが話をしていた頃、モレクと対峙していたカインは勝利のヒントを手繰り寄せようと、失われていた記憶を掘り起こす。

◆

カインはS地区に住んでいたとき弟『アベル』と共に、マホウの正しい使い方と制御を教える教会傘下の“学院”に通っていた。
授業は数学や、日本語、塔史、経済などの数世紀前からごく当たり前に行われてきた授業に加えて、自らに宿る“罪”を使役する方法を学ぶ『マホウの授業』があった。
マホウ授業では自分の罪を探すための方法から、応用術まで段階を経て個人個人に教えていく。
カインは入学して一年過ぎたころに自らの罪に気づき、マホウを使役することができるようになった。
――実際には真に使えてはいなかったのだが。
『Ｙｅｔｚｉｒａｈ』の文言と共に指先から糸が出るのが楽しくてたまらない。学校では街では使わないように言われていたが、カインは所かまわず糸を出してはいろんなものを編んで遊んでいた。
学校でいち早くマホウを開花させたカインは神童と呼ばれ、羨望と嫉妬の念を集めていた。子供の嫉妬と言うのは可愛くも残酷なもので、いじめの対象にこそなりはしなかったが、友達の一人も居なかった。
そんな時公園で出会った名も知らぬ同年代の子供。
「ねぇ、一緒に遊ぼう？」

金色の短髪と端正な顔立ちの少年と二人で塔の麓にある公園で遊ぶことが次第に日課になっていった。
彼はまだマホウを遣う事は出来なかったが、カインのマホウに対し「面白いね、もっと見せて欲しい」と言ってくれ、名前も知らぬまま友達になった。

そんなある日、いつものように塔の麓の公園で遊ぶことがあった。少年とカインは形成で作り出した糸のボールで遊んでいたが、少年は飽きたのだろう。
「砂場もあるし、棒倒ししようよ！」
「うん、わかった！“棒倒し”しよう！」
カインが同意した瞬間、塔の方から大きな揺れが起こり轟音が響く。
形成を解除しない状態で“遊びの宣言”をしてしまった為、カイン“本来の形成”が発動していたのだ。
詠唱は基本的にドイツ語で紡がれるが、本来マホウが発動する条件は“知覚”と“アクセス”すること。深くアクセスする為に詠唱が存在する。
「カイン、君のマホウは“糸繰り”じゃなかったの！？」
「違う、僕じゃない！」
塔はなおも傾きを続ける。すべての街の中心である塔がカインたちが立っているところとは逆方向へと、S地区の下部から折れようとしている。天蓋からきしむ音がS地区大層に響く。
「なんてことだ…塔が――倒れる！」
誰かが叫ぶ。
いや、町中から悲鳴が響く。
カインはただ立ち尽くしていた。
「反応、あの少年です！」
「あんな子供が……くっ！“エクスシア第二分隊”これよりテロリストを捕縛する！」

数分の時間もかけず治安部隊（エクスシア）が駆けつけ、カインと少年に向け射出式スタンガンを放っていた。
カインが気絶したところで揺れは止まり、辺りは静寂を取り戻す。
「塔の隔離施設へ！」
治安部隊と先の混乱による喧騒が去った頃、公園には誰もいなかった。

連れて行かれた先は塔内のどこか。カインは冷たい床で目を覚ますと、見張りをしていた治安部隊の人間に声をかけられ別室に通される。
その部屋には父さんと母さん、そして左手のない男がいた。
「カイン！」
「父さん！母さん！」
カインの父親が部屋に通されたカインに声をかけるが、男が右手を上げ、父親を制する。
「目を覚ましたか、カイン君。私は『ウリエル』、治安部隊エクスシアの隊長をやっている。」
ウリエルと名乗った男左手のない男は口元に柔らかな笑みを浮かべているが、目には厳しさが宿っていた。
「君はマホウで塔を壊そうとした。君の罪が何かの解析が――終わったようだな。」
敬礼と共に制服を着た人間が室内へと入ってきた。
「解析結果が出ました。詳細はこちらをご覧ください。」
入ってきた治安部隊の隊員がウリエルへと一枚の紙を渡す。手元の紙に目を通しながらウリエルは眉をしかめた。
「ふむ……不明と来たか。けれど――」
その先は沈黙を守っていたカインの母親が放つヒステリックな声で遮られた。
光の無かった瞳がカインを捕らえ、光を取り戻す。カインがいたことにたった今気がついたようだ。

「カイン！カイン！ねぇ、あの子が何をしたって言うのよ！」
「彼自身が何をしたのか、我々には“わかりません”が、カイン君のマホウは塔を壊そうとした。」
ウリエルはカインの母親から視線を外し、もう一度手元の紙に目を落とす。
そして、先程言おうとした言葉の続きを口にする。
「資料を見る限り、彼のマホウは『クラス・A』。概念形成の攻撃性マホウと思われます。」
驚きに目を見開く両親。概念形成のできるマホウ使いは“S地区には少数しか存在していない”。そして、クラス・B―物質形成マホウ―以上の攻撃特化マホウが使用できる人間に対しては塔が一つの指令を下していた。
「た…確かクラス・B以上の攻撃性マホウの能力者は――――。」
父親はウリエルの言葉の裏に隠された、『指令を遂行する意思』に気がついた。
「えぇ、ご存知の通りM地区への追放、隔離処分。そして先も話したとおり、あの少年はクラス・Aの攻撃特化マホウを有しています。」
――危険分子なんですよ――
M地区への追放、それはこの都市において死刑を宣告されるも同義。
S地区から下、D地区上二層『市場区』、D地区中層『生産従事者居住区』、D地区下二層『生産区』。この五つの層の更に下にM地区上層『旧居住区大層』が存在する。またの名を――『隔離街』
上位の攻撃性マホウ使いと上層の犯罪者が押し込められており、更にM地区の中層以下は死の世界であるため、最も死に近い場所と言われている。
「そんなところにカインを！この子はまだ8歳なのよ！」
母親が拘束されているカインに近づこうとするが、周囲にいた治安部隊の隊員に取り押さえられる。

「母さん！くそっ！」
取り押さえられた母親に近づこうとするカインも押さえつけられ、隊員が猿ぐつわを噛ませようとする。
「お気持ちはわかりますが、これも『塔の意思』です。」
ウリエルはそう言った後、カインを押さえつけている隊員を見て首肯する。
「M地区へ連行しろ！」
「父さん！母さん！――――っ！お父さん！お母さん！」
猿ぐつわを噛ませようとする隊員に抵抗しながら、カインは両親を呼ぶ。
「すまないね、これもNo．3に生きる全ての人の安全の為だ。」
ウリエルの言葉の後、数瞬で口は封じられ衝撃と共に意識は闇に落ちた。

◆

M地区に連行されカインは“この場所”で目を覚ましたのを思い出す。
つぅと目を向けるのは先程までエイダと座っていたソファ、そして部屋の広さの割に調度品が少ない伽藍とした空間。対峙しているモレクを忘れたわけじゃないが、視線をあちこちに飛ばすと10年前となんら変わっていないことに気づく。
「思い出してしまえば懐かしい場所だろう。」
モレクが口元を歪め笑ってみせる。
「あぁ、そうだな。」
カインは右足と右肩を引き、右手をへその前に構え左手を肩の高さに軽く上げる。
「こいつも思い出したよ。記憶を封じられていたから、ついさっきまで忘れていたけどな。」
モレクも同じ構えを取る。そして引いた右足を軽く上げると、ソ

ファが吹き飛んだ。
「師匠の私に勝てると思っているのか？ｃｒｙｂａｂｙ。」
「罪に近いあんたに身体能力じゃ明らかに負けてるかも知れないが――」
カインはモレクと同じように右足を軽く上げ、ソファを吹き飛ばす。ソファは壁際に立っていたイサクとエイダに向かって飛んでいくが、途中で焼失した。
イサクが何か言っていたがカインは聞こえなかった。
「一線を退いてるあんたに負ける気はしない！」
体勢を低くして跳躍し一瞬で距離を詰める。だがモレクは既にその場にはいなかった。
「まったく、相変わらず真正直なやつだな。」
死角から声が聞こえ、声のほうへと構えようとしたその瞬間、衝撃と共に地から足が離れ体が宙に浮く。
「ほら、現状の確認の前にすることがあるだろう。」
――とにかく防御を！
顔の前でクロスさせた腕に衝撃が走ると背中から叩きつけられる。
「――っは。」
おそらく机に叩き落されたのだろう。埃と木屑が視界を舞っていた。
頭の上へと足を伸ばし腕の力を使い跳躍して体勢を立て直す。
壊れた机の向こうにはモレクが構えを解かずこちらを見ている。
「もう終わりか？ｃｒｙｂａｂｙ。」
「まだまだ……もう負けて泣くわけにはいかないんだよ！」
手に持っていた木屑を握り締めながらカインは咆哮した。

◆

Ｍ地区での生き方を教えてくれたのはモレクだった。どういうわけかＭ地区に連行されたカインは“螺旋の蛇”本部に運ばれていた。

治安部隊の心遣いなのか、隔離街に捨てられた俺を“螺旋の蛇”の誰かが連れて来てくれたのか。モレクは語らなかった。
M地区のルール、生き抜く術、形成の使い方。格闘術や剣術もその一環。
手合わせをした時モレクはまったく容赦しない。全身が砕けるような痛みと理不尽さえ感じるほどの強さにカインはよく泣いた。
ある時からモレクと手合わせしている時には『カイン』と呼ばれることは無くなり、『泣き虫(crybaby)』と呼ばれるようになる。
そんなカインを慰め手助けしてくれたのが同室で暮らしていたイサクだった。
イサクは兄『イシュマエル』と共にカインに個人的な稽古を付けてくれた。
その知能の高さから早くも参謀として知略を巡らせていたイサクと、マホウ遣いの中でも特に身体能力が高いイシュマエルの兄弟。
この二人に引き上げられるようにカインは体術、戦術、マホウに磨きをかけていった。
時折「筋トレに付き合え」とサムソンに連れられトレーニングルームで共に汗を流したりと充実した日々を送っていた。
2年の間を共に過ごすことでカインはモレクを『親父』、イサクを『兄貴』と呼ぶようになった。
そんなある日、カインはモレクに呼び出される。訓練の時間にはまだ早い時間。
ノックの後鉄扉を開くと、モレクとイサク、サムソンとイシュマエルがいた。
座れと言われ、ソファに座ったところでモレクが口を開く。
「カイン、そろそろお前も一人で生きていけるようになったみたいだな。」
モレクにこそ勝てないが、数歳しか離れていないイサク達には負けることは無かった。
マホウの使用方法も高いレベルで習得した。外に出たところで命

を奪われる可能性は少ない。
「この前なんかイシュマエルにも勝ったんだ！後は親父だけだぞ。」
「うん、お前は強くなった。だからお前を外に出そうと思う。」
「……え？」
ぽかんと口を開きモレクを見る。モレクはカインの頭を撫でながら話を続けた。
「お前のマホウは強力で、塔側も生かすつもりは無かったみたいだ。実は治安部隊の人間に殺されかけていたところにたまたま出くわして、ココに連れてきたんだ。」
「じゃあ、それこそ外は危険なんじゃないのか！？……あ、――」
そう言った後にカインは気づく。自分がここにいると言うことが“螺旋の蛇”と言う地下組織を潰す格好の理由になってしまう。
「これからお前の７歳から１０歳までの記憶を一部“封”じる。これでお前が望まない限り『本当の形成』は使えない。隔離街なんていう掃き溜めだが――」
「親父、俺は大丈夫。」
「すまないな、こっちの勝手な都合で。」
「なぁ、また会えるだろ？」
「俺たちが力を必要とした時迎えに行くさ。」
イサクは哀しげに微笑んで、成就されるかわからない言葉をカインに告げる。
グッと唇をかんだ後で、言葉を搾り出す。
「――待ってる。」
知らず涙がこぼれ、声が震えた。
モレクは目を伏せ、大きく息を吸って自らのマホウを形作る。
“Ｙｅｔｚｉｒａｈ”Ｋｅｔｔｅ・Ｅｔｗａｓ　Ｇｅｄ？ｃｈｔｎｉｓ――“形成”封・指定記憶」
記憶が封じられる反動か、視界が暗くなり、浮遊感が身体を包み込む。
意識を手放す瞬間に、やさしく響くモレクの声が耳に届く。

「また会おう、ｃｒｙｂａｂｙ。」

———くそっ、泣き虫って言うなよ。

◆

Act. 9 ―Heilige Sch?tze “自己と世界”―

モレクとの距離は二歩半。お互いにとってこの距離はあってないようなもの。

距離を詰めても、カインの拳が届く前にモレクは二、三発の攻撃を入れてくるのだろう。捌き切れなければ死に到る攻撃を。

「期待はずれか……お前の“願い”は世界を、自分を変えるものではなかったということか。」

「何を言ってるんだ？」

モレクはその構えを解き、俯いて肩の高さで左腕を真っ直ぐ横に上げる。

「私達…いや、私が期待したのはお前の中で燻る“願い”、“渇望”の力だ。」

顔を上げたモレクはカインに向かって話を続ける。

「マホウ遣いは、“罪”を形にすることが出来るだけじゃない。個人が持つ“願いや渇望”を“実現させる”力もある。私はその力が現れることを期待した。だが、お前はこの世界に不満はなく、求める物や変えたい物は無い様だな。」

「何を…言ってるんだ…？」

モレクの放つ異様なまでの重圧。疑問に解はなくモレクは話を続ける。

「この力は“罪に準じて形を成す”『形成』とは違い、“自らの望むものを新しく作り出すもの”。」

イサクはエイダと共に部屋の隅へと移動する。

「残念だ、力なき義理の息子よ。」

カインの言葉を待たずモレクは小さく息を吸い、世界を変質させる言葉を紡ぐ。

「“Briah”Freiheit und Kette――“創

造”自由と束縛」

「なっ！」

コンクリートで作られた部屋はそこにはなく、黒と赤の空間に変わっていた。

床は確かに判別できるが、壁と天井がその空間には存在していないように見える。それはまさに異界。

「ようこそ、“私の世界”へ。この空間は『あらゆる束縛から解き放たれたい』という私の“願望”が“創り出した世界”だ。」

「なるほど、親父の心の中って訳か。」

「当たらずとも遠からずと言った所かな。私がこの空間で望めば“時間”と“重力”から解き放たれる。この空間限定だがな。」

「ネタばらししても大丈夫なのかよ。敵に手の内を見せるのはマホウ遣いのご法度だろ？」

「ハンディキャップだよ。私が束縛から解き放たれるということだけがこの空間の力ではないからね。この空間の真の力は――」

モレクが右手の人差し指をスゥッと上げ「重力六分の一」と言うと空間が微かに揺れ、カインの足元から1本の鎖が現れる。

その瞬間“身体が酷く重く感じた”。鎖を避けようとするが、身体が言うことを聞かない。鎖は右の太ももに巻きつく。鎖自体に攻撃力はないようだ。だが、この身体の重さ、“まるで重力が強くなってしまったかのよう――”。

「く…そっ、どうなってんだ。」

「私が感じている重力は通常の六分の一。そして、私に科せられていた重力の残り六分の五を今お前が背負っている。」

「……重力と時間…自分が解放された分、人に背負わすことが出来る空間って事か…。チートじゃねぇか…。」

「それが“創造”の力さ。他を圧倒的に制圧できる唯一の力。さて、おしゃべりは終わりだ。重力を減らしすぎると腕力が減るのでね……私の時間も背負っても■■■■■」

モレクの言葉が徐々に早回しになり、聞き取れなくなる。いつの間にか両太ももに鎖が巻きついていた。
動きも早回しになり一瞬で近付かれたことを気がついた時には、既に腹部に重い一撃。
肺から空気が押し出され、喉から出切る前に二撃目。重力はほぼ倍加しているというのに身体が宙に浮き、地に足が着いていない状態で三撃目。
「■■■■だったかな。まぁ、重力の関係で一撃の威力はそこまでないだろう。」
時間の枷を解いたのか、モレクの声が聞き取れるようになる。同時に、“感じていなかった”痛みが身を襲う。
「アッ…ガッ！」
痛みに堪えるため、反射的に身体を丸めようとするが、重力の枷のせいで少しの動きにすら苦痛が伴う。
「…ッ！…確か…に……“創造”前の一撃に比べたら可愛いもんだな。」
「だろうな。重力と言う枷から解き放たれると、どうも踏ん張りが悪くてな。だから、一撃を重くするこんな技も■■■」
（また時間を…！）
時が引き伸ばされるが、身体が軽い。身に巻きついている鎖は一本になっていて、身体を起こすと勢いはそのままに前のめりになる。
（今度は重力が…何故――）
その疑問は目の前の光景によって氷解する。
早送りをされているはずのモレクは一向に一撃を放たず、カインの目の前で右腕を振り上げた状態で静止している。顔はしかめられ、相当の力が右腕にかかっているように見える。
どんどん軽くなっていくカインの身体。危険を感じ回避しようとしたところで、重力と時間が元に戻る。
力を溜め続け、重力から解放されたモレクの拳がカインの胸に突き刺さる。

「――――！！」
その威力と拳速は“元々”の強さの比ではない。
拳の衝撃が空間に走った後一間置き、まるで重力の枷から解き放たれたかのようにカインの身体が宙に舞う。
“Ｆａｕｓｔ　ｖｏｎ　Ｇｏｔｔ”――私は過信していたのか？
……いずれにしても残念だよ、カイン。」
床に伏せ、口から血を流しながら焦点の合わない瞳で床とモレクを見ているカイン。
失望に彩られた声が耳に届く。
――待てよ。
――まだ終わっちゃいねえよ。
――あぁ、そうだ――俺はこんな理不尽な現実を……

暗くなる視界。
そこに割り込むノイズ。

『変えたいと強く望んでいる。そうよね、カイン。』

意識を手放したと思った。
完全に死んだと思った。
天国には古い紙と薄いカビの匂い、そして紅茶の香りが漂っていた。

◆

『ようこそ、未来の英雄（ヒーロー）。』

甘い香りと鈴の鳴るような澄んだ声に導かれて眼を覚ますとそこは“図書館”だった。
背の高い書架、長い廊下、木製のイスは以前見たときと変わらな

いが、大きな違いが二つ。
一つ目は“影”とカインの間にある机と一組のティーセット。そして、二つ目は“影の形が明らかに女性である”ということ。
『まずはお茶でもいかが？』
磁器で作られたティーカップに琥珀色の液体が注がれる。警戒しながら口にすると甘味と苦味が同居した味と甘く柔らかい香りが口の中に広がる。
カインはほうと感心し、ティーカップを手にしたまま“影”に話しかける。
「アンタとははじめまして。で良いんだな。」
変わらず顔がない“影”だが、確かに微笑してカインの問いに答える。
『以前会った時に言ったでしょう？“定義は出来ない”と。』
「なら、アンタは。」
『“変わっていない”ともいえるし“変わった”とも言える。あなたの空想の産物、イメージと言ってしまっても間違いではないわ。だって答えなんてないのだし。』
確かに、定義できない以上そこに正しい回答は存在しない。
『それにしても、短期間に二度も来るなんて余程ココが気に入ったのね。』
「“偶々”だ。今回も何で来ちまったのか解らない。」
『死んだからじゃない？ココは世界の中心で世界の果てだから。』
「…な！」
『冗談よ。』
“影”は口元に手を当て小さく笑った後でカインと眼を合わせる。
『薄々感づいてるんでしょう？ここに来る理由はいつだって一つよ。』
「“求めた”から――でも、マホウはもう会得した。他に何を求めたと……。」

『モレクの遣っている“アレ”でしょう。』
「……“創造（Ｂｒｉａｈ）”。」
『解ってるじゃない。“創造”に必要なのはキミの内で燻る“願い”、“渇望”。それに手を触れたから、ココに至れた。瀕死の状態でも触れられなければ――』
あのまま死んでいたわ。良かったわね。と軽い調子で話す“影”。
「ここに来るには鍵が必要なのか。」
『Ｇｅｎａｕ（その通り）！求める物とそれに連なる鍵を持つのが“図書館（ココ）”に来る条件よ。そしてココに至れるということは同時に――』
どこからともなく現れる鎖で縛られた一冊の本を“影”は机の上に置く。
『求めたものが与えられる。あなたの持つ“創造（ねがい）に至る鍵”は何？』
「俺は――俺は“この理不尽な現実を変えたい”。“過去に存在した神や、英雄のように”。」
“影”が微笑む。
その言葉を待っていたと言わんばかりに本に巻きついていた鎖が解かれ、本自体も消失する。
「中身が気になるんだが、また読めないのか。」
『まぁ、そういう“本”だと思って頂戴。“得た”という実感はないと思うわ。気がついていなかっただけで元々あなたの内側にあったものだから。』
カインは口の端で笑って、問題ないさ。と言った
「元々、“俺自身の願いから生まれた力”だ。他人にどうこうできるものでもないんだろ？」
『……えぇ、そうね。』
“影”は微かに哀しげな気配を見せて『さあ』と言う。
『余計なお喋りはする必要ないわ。前と同じ、お帰りは後ろよ。』
「分かった。」
『次に会う時は無様な状態ではないことを祈っているわ。』

「なるべく世話にならないようにするさ。」
そう言ってカインは扉に向かって走り始める。
未来を切り開く力をその身に宿して。
『“存在しないもの”も“私”の手中。“理解”“創造”して“その手”で未来を鎖すものを切り開きなさい。』
“影”は振り返ることなく走るカインの背中に声をかけ、扉が消えるまでをじっと見続ける。
すっかり冷めてしまった紅茶を一口飲んで息を吐き出す。
『これでまたピースが一つ埋まった。終わりまでは遠いけど、まだまだ穴は多い…イレギュラーの影響、か……。こんなの初めてだけど、上手く行くと良いね、カイン。』

◆

「……おい。待てよ親父！」
モレクが振り返るとゆらりと立ち上がるカインの姿があった。
“神の拳”をまともに受けたというのにまだ立ち上がる事が出来るのかと、モレクは驚愕で眼を見開く。
手加減はしていない。確かに肺が潰れていてもおかしくない程の重症を負っているはずのカインはまるで“攻撃（神の拳）”を受けていないかのように立ち上がる。
口元の血を拭い、笑みすら浮かべるカイン。怪我が回復している要因はわからないがモレクはカインが“何か”を得たのに気がついた。
「面白い。見つけたのだろう！？さぁ、お前の願いを見せてみろ！カイン！！」
「あぁ、見つけた。」
俺は世界を変えたかったんだ。過去の偉人達が全てに抗い改革を

起こしていったように。
俺の望みの為にこの世界を塗り替えたいわけじゃない。俺は環境や他者に変化を求めない。自らの力で“変えていく”そう、俺の求める力は自らの内にある。
世界に求めることは何一つない。俺は俺に力を求める。
「これが、“俺が俺に求める世界だ”。」
言葉と同時に膝をつき、右手を床につけた。
――この“間違った世界(くさり)”を“両断(はかい)”する。
文言は自然と口から溢れ出る。
力は求めた能力(チカラ)を“創造”する。――
“Ｂｒｉａｈ”Ｈｅｉｌｉｇｅ　Ｓｃｈ？ｔｚｅ・Ｈａｌｂｉｅｒｕｎｇ　Ｓａｍｏｓｅｋ――“創造”神器・両断のサモセク」
文言と共に右手を引き上げると、両刃のナイフが現れる。
あらゆる“間違い”を両断する“概念”が込められたナイフ。
ロシアで多くの物語に登場するが、形や出自は共通しない。“両断”という概念が形を成した刃。
今、手元にあるのは刃渡り１５センチほどの小さなもの。
「これが俺の“創造”。かつて英雄や神が使用した武器を、能力もそのままに創り出す。」
そうか、なるほどな。とモレクは笑みを浮かべる。
「いいのか？敵に手の内を明かしても。」
“ハンディキャップ”だよ。」
モレクは声を出して笑い、仕返しか、そうかそうか。と言い、カインと眼を合わせる。
「私の世界とお前自身が求めたもの、果たしてどちらが勝つのかな。」

「さぁね。まぁすぐに分かるさ。」
カインはサモセクを持った手を上へ掲げる。モレクも人差し指をたてて腕を伸ばす。
「さあ、再び始めよう、カイン。」
「親父、悪いけど超えさせて貰う。」

終わったと思われた戦いは再び幕を上げる。

Act. 10 ―Ander“泣き虫息子”―

傷が癒えている。
モレクの攻撃で負った致命傷は跡形も無く完治していた。
“図書館”に行ったあとは不思議な現象が起こるのはアルケーの戦いの時にも経験したこと。改めて分析している暇は今は無い。
今は手に持つこの力で、目の前の敵を倒すことが最優先事項。
あらゆる間違いを両断するこのナイフ。それは世界に突如存在した“特異点”を消すことに特化した“対創造”の武器。
「どんな力を得ようとそれが揮われなければ何の意味も無い。」
先制を取ったのはモレクだった。
世界対個人。力の及ぶ範囲には絶対的な優位を持つモレクの創造がその力を発揮する。
時間と重力が枷となってカインを襲う。カインはナイフを振るい鎖を断とうとするが、枷を断ち切ることは出来ない。
「っ！……なるほどな。」
この“異界”にとって、『相手に枷を負わせる』と言うのは“正常なこと”。そして枷を負うのは『カイン自身』。
時間と重力から解き放たれたモレクは一瞬でカインに迫る。この重力では一撃は軽い物になるだろうが、痛みから思考を鈍らせるには十分な威力。
これから連撃が襲って来ると言うのにカインは口元に笑みを浮かべる。サモセクを顕現したときに“本来の使い方”も知っていたから。
その短い刀身は振って使うには適さない。鋭利な切っ先に重心がすえられており、柄と刀身の幅に殆ど差は無い。
これは“投擲”を使用の前提にして作られた武器。
サモセクは現世に現れた神話の世界の生き物を両断した“投げナ

イフ”。

「奔れ！サモセク！」

迫るモレクめがけてサモセクを投擲する。カインの手から離れた瞬間、サモセクは枷から解き放たれ一直線にモレクに向かって奔る。

だが、モレクは重力と時間からは“解放”されている為、“普通”の時間を奔るサモセクに当たるわけなど無く、首を少し動かし回避をする。

モレクの顔には失望が浮かび、引き伸ばされた一瞬で拳が迫る。だが、カインは変わらず笑っていた。

そしてモレクの拳はカインに当たることは無かった。

拳は太刀の鎬で受け止められていた。

「リーダーの創造が！？」

現実の世界で待っていたイサクとエイダは黒いドーム型の空間が一瞬真っ二つに割れ、霧散するのを終始見ていた。

「モレクさんの心象世界だ、って……。」

「あぁ、“創造”は心の力。壊れる時は術者が死ぬか、それを凌駕する力が……リーダーは生きてるみたいだ……まさか。」

「……カインの力。」

「創造を開花させたか。」

「どういうことだ……。」

「間違いを両断したんだよ。これでイーブン……いや、俺が優勢か？」

モレクの世界は“サモセクに両断され消滅していた”。

元々カインはモレクに当てるつもりは無かった。一瞬でもモレクに隙を作る、そしてサモセクを“奔らせる”というのが狙いだった。

どんな投げ方をしても、サモセクは“間違いを両断する”。概念

で出来上がった武器と言うのは総じて“構成する概念に忠実”なものだ。
この世界に突如現れた特異点。それを切り裂くことこそサモセクに課せられた使命。
そして、役目を果たしたサモセクは消え、カインの手には違う武器が顕現している。

「“蛇殺し・天羽々斬剣”。“螺旋の蛇”の頭を切るにはふさわしい剣だろ。」

両刃の剣。刀身は拳十個分な所から十拳剣とも呼ばれる。三貴子の末子スサノオノミコトがヤマタノオロチ退治の際に揮ったと言われ、名に含まれる“羽々”は大蛇を表す。
名前が強く力を持つ神代において“羽々”と言う名を冠した十拳剣は邪を斬る為に存在していると言っても過言ではない。

「確かにな。だが、私は“必殺技”を使わなくても強いぞ。」
「気は抜いていない。“創造”を破ったからとは言え勝ったつもりは無いさ。」
「フッ、そうか――ｃｒｙｂａｂｙ、決着だ。」
「あぁ、分かった。」

――その決着の形は如何なるものだろうかとイサクは激しく繰り広げられる戦いを見る。
創造を開花させたとは言え、相手は３００年もの間自らの罪と向き合い“抗ってきた”男。すべてにおいてカインが凌駕しうる隙など存在していない“はず”。
「嘘・・・だろ？」
だというのに目の前で繰り広げられている戦闘において力の差は互角。いや、確かに力と戦闘技術と言う点においてはモレクの方が

優勢だ。カインの揮う武器を掻い潜り急所と言う急所に致死性の一撃を見舞っている。
だが、カインは倒れることはおろか、膝をつくことすらしていなかった。それはまるで、モレクの攻撃が一切効いていない――当たってすらいないかのように。
推測するにカインの創造はおそらくモレクの攻撃を受け止めた剣を創り、取り出したように『武器を創りだすという事』。それもただの武器ではなく、概念がそのまま形になったような武器。
天羽々斬剣と言う剣は蛇、蛇神――読みのとおり邪神を切るという一点に特化した武器。決して『攻撃の無効化』と言う概念は持ち合わせていない。

「まだ・・・倒れないか！」

モレク渾身一撃がカインに当たる――今度は“見えた”。カインにモレクの拳は“届いていない”。
瞬間確かに当たっているのだが、次の瞬間には紙一重でかわしているのだ。
あたったという事実がまるで幻のように掻き消える。

「まだ？まだ、一撃も当たっていないぜ！親父！！」
伸びきったモレクの右腕を肩口から切り落とそうとカインは剣を動かすが、それを予測していたモレクは柄を左手で掴み、カインの身体ごと放り投げる。
「・・・・・・！」
壁に体を打ちつけたカインに一瞬で迫り――

確実に当たる距離、タイミング。だが、その拳はカインには届かない。まるで――
「まるで、モレクさんの攻撃が当たらないようになってるみたい。」

正面に立つエイダが考えを読み取ったように呟く。
そう、カインに向けられた攻撃と言うものことごとくが当たらない。カインが避けているわけではなく、確実に当たっていた“はず”のもの。
当たらないようになっているなんて生易しいものじゃない。“当たっているのに当たっていない”。
「・・・・・・事実が変化している。」
事象の置換。書き換え。カインのマホウでも創造でもない。
（もう一つの力――なるほど、“だから”か。）

一人得心した笑みを浮かべ、感心から関心へとイサクの目の色が変化する。
戦いに身を置いている二人は勿論、エイダもイサクの表情の変化に気が付かないまま、蜃気楼に包まれたような攻防に幕が下りようとしていた。

カインはモレクの拳をしゃがんで避け、腹に向けて刺突を繰り出すがその鎬を叩かれ切っ先が揺らぐ。が、これは予測していたこと。刺突をフェイントにカインは足払いから、当身をモレクに食らわせる。
「っ！！」
流石のモレクも体勢を戻すことができず尻餅をついたところに、頭の上から声が落ちる。
モレクは誰に向けるでもなく満足げに微笑んで、剣が身を断つ瞬間を待った。

記憶が戻った時からカインは躊躇い続けていた。
自分を助け、育ててくれた父とも呼べる存在と命を懸けたやり取りをしてもいいのだろうかと。
エイダを助ける為とは言え、自分にモレクが殺せるのだろうか。

自分の目の前で腰を落としている男。“不老”なのに昔に比べるとずいぶん小さくなってしまったように見える。
目頭が熱くなり咆哮にも似た叫びをあげる。

弱肉強食がここでのルール。
あぁ。なら、俺はとうの昔に――
だから、俺には――
――ごめん。

「何故止めを刺さない？躊躇うなと教えたはずだが。」
モレクは体勢を変えずカインの剣を待っているようだった。
カインは俯き剣を落とす。手から離れた瞬間、『天羽々斬剣』は最初から無かったかのように掻き消える。
「あんたがいなきゃ、俺は死んでる。俺は、“親父”を殺せない。」
声を震わせながらカインは一歩下がり、膝をついた。
「俺を育てて、生き方を教えてくれて・・・・・あんたは俺の親父なんだ。」
カインの心に戦意は欠片も残っていなかった。容赦しないなんてできるはず無い。
「エイダ・・・・・ごめん。」

俺には――無理なんだ。
一つを選ぶことなんてできない弱い人間なんだ。

モレクは膝をついているカインの前に行きしゃがんで頭を掴むと顔を上げさせた。
「……親父ってのはな、子供に超えられるためにでかくあり続けるんだよ。」

そして表情を一変させてカインに笑みを向けながら「強くなった

な、泣き虫息子」とモレクは続けた。
「でも、親父！俺は――」
「いいや、カイン。お前は強くなったよ。力だけじゃない、人としても強くなったんだ。私はお前を誇りに思うよ。」
嬉しそうにカインの頭を繰り返し撫でるモレクの手は、幼き日の思い出と何一つ変わらなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9719v/

セフィロトの樹は原罪の実をつける

2011年11月4日03時34分発行